



震災復興に向けた  
大学生のまなざし

---

社会連携科目「災害支援実践」レポート・活動報告

# はじめに

レポート・活動報告集に寄せて

平成 28 年 4 月 14 日、熊本県熊本地方を震源とする M6.5 の地震が発生し、震源地となった益城町では震度 7 を計測しました。同 16 日には、14 日を超える M7.3、最大震度 7 の地震が発生し、学生や地域住民が熊本大学のグラウンドや体育館に避難してきました。熊本大学の位置する熊本市中心部の震度は 5 強 (14 日) と 6 強 (16 日)。私たちの自宅も学校も被害を受け、続く余震に不安な日々が始まりました。

そうした中、「私たちも何かしたい」「できることをやらなくては」と動き始める大学生が数多くいました。大学での避難所運営、各被災自治体のボランティアセンターの立ち上げ、がれきの片付けなど災害直後の急性期から動き始めた学生たちがいました。避難所で運動指導を行う学生、血圧測定や健康相談を受けながら声掛けを続ける学生、子供たちに本を読んだりグラウンドに連れ出したりしてくれた学生、実家のある県外から募金活動に参加をしたり支援物資の仕分け作業に参加した学生。多くの学生が、自分にできることを探し、自分にできる活動を行ってきました。

熊本大学では、震災直後に「災害支援実践」という科目が立ち上がり、被災地で活動する学生たちに単位を付与することになりました。単にボランティア活動に従事しただけではなく、ボランティア活動に参加するにあたり、その心構えをしっかりと学び、活動参加後には報告会への参加やレポートの作成が単位付与の条件として科されました。レポートの課題は、活動を振り返り、ボランティア活動での経験を後輩にどのように伝えればよいかを問うものです。その中で、こうした自分たちの経験を形あるものとして残してほしいという要望がありました。

この冊子は、「災害支援実践」に参加した学生たちが被災地でどのような活動に従事し、後輩たちにどのようなメッセージを託したのか、そうした大学生たちの声をまとめたものです。4 月 14 日のあの日、大学生たちがそれぞれに立ち上がり、地域のため、熊本のために考え行動した記録として後輩につながっていくことを期待します。

平成 29 年 3 月 31 日  
災害支援実践 担当教職員一同

※ 本報告集は社会連携科目「災害支援実践」を受講した学生のレポートを掲載しています。誤字・脱字および表現に相違等があった場合はご容赦くださいますようお願い申し上げます。

# Index

レポート・活動報告一覧

No.01 西川 枝里 (文・1 年) .....	3
No.02 高 山 琳 (文・1 年) .....	4
No.03 小 村 千 紘 (文・1 年) .....	5
No.04 澁 谷 明 佳 (文・1 年) .....	6
No.05 椎 葉 大 和 (教育・1 年) .....	7
No.06 友 成 勇 太 朗 (教育・1 年) .....	8
No.07 浅 井 敬 大 (教育・1 年) .....	9
No.08 島 村 健 佑 (教育・1 年) .....	10
No.09 久 保 太 志 朗 (教育・1 年) .....	11
No.10 田 代 早 紀 (教育・2 年) .....	12
No.11 内 谷 夏 貴 (教育・2 年) .....	13
No.12 藤 本 大 護 (教育・2 年) .....	14
No.13 山 田 裕 崇 (教育・3 年) .....	15
No.14 菊 池 豊 (教育・3 年) .....	16
No.15 緒 方 李 華 (法・1 年) .....	17
No.16 江 村 和 大 (法・1 年) .....	18
No.17 野 田 栄 明 (法・1 年) .....	19
No.18 津 留 彬 斗 (理・1 年) .....	20
No.19 緒 方 裕 也 (理・1 年) .....	21
No.20 上 野 雅 仁 (理・2 年) .....	22
No.21 川 端 大 輝 (理・2 年) .....	23
No.22 中 野 智 広 (理・3 年) .....	24
No.23 西 本 徹 (理・4 年) .....	25
No.24 持 田 香 織 (医・1 年) .....	26
No.25 壇 千 智 (医・1 年) .....	27
No.26 有 働 由 梨 (医・1 年) .....	28
No.27 有 村 優 花 (医・1 年) .....	29
No.28 上 野 佐 和 子 (医・1 年) .....	30
No.29 永 野 遥 希 (医・1 年) .....	31
No.30 大 淵 彌 潮 (医・2 年) .....	32
No.31 野 口 勇 夢 (薬・1 年) .....	33
No.32 木 原 拓 也 (薬・1 年) .....	34
No.33 前 田 信 行 (工・1 年) .....	35
No.34 北 山 光 洋 (工・1 年) .....	36
No.35 今 村 友 香 (工・1 年) .....	37
No.36 大 内 憲 人 (工・1 年) .....	38
No.37 瀧 上 裕 介 (工・1 年) .....	39
No.38 那 須 亮 太 (工・1 年) .....	40
No.39 段 原 一 仁 (工・1 年) .....	41
No.40 濱 田 翔 平 (工・1 年) .....	42
No.41 黒 木 駿 (工・1 年) .....	43
No.42 三 浦 萌 子 (工・1 年) .....	44
No.43 生 野 友 梨 (工・2 年) .....	45
No.44 石 本 瑛 寛 (工・2 年) .....	46
No.45 宮 崎 孝 太 (工・2 年) .....	47
No.46 大 坂 洋 平 (工・2 年) .....	48
No.47 興 梶 春 花 (工・2 年) .....	49
No.48 (匿名希望) (工・2 年) .....	50
No.49 平 川 大 希 (工・3 年) .....	51
No.50 山 田 七 生 (工・3 年) .....	52
No.51 野 正 裕 介 (工・3 年) .....	53
No.52 吉 田 啓 汰 (工・4 年) .....	54

# No.01

文学部 総合人間学科 1年

西川枝里

活動日時 平成 28 年 4 月 14 日 ~ 平成 28 年 4 月 30 日  
(実働 50 時間・14 日)

活動場所 力合小学校

## 活動内容

地震直後から数日間、テレビやラジオ、新聞等で集めた情報を学科のみんなに伝えていた。(地震発生直後は安否確認をした。その後、震源地・震度・マグニチュード・津波情報といった地震に関する情報を伝え、また、火消しや逃げ場の確保といった優先すべきことの確認を促し、専門家によるとどこに逃げるべきかといった情報など様々なことを伝えた。)避難所では、まず物資運搬の手伝いをした。水道が止まりトイレが流れなくなったため、近くの川から水を汲みトイレの水を流した。体育館の中では、いつでも逃げられるようにと靴で生活していたため中が砂で汚れていた。ほうきでその砂を掃除した。ご飯の用意の手伝いもした。水が貴重だったため、米のとぎ汁を桶に取っておき、それで使用した食器類を洗った。おかずを紙皿に盛り付けたりおにぎりを作ったりした。配膳も行った。簡単なもののみではあるが、けが人の手当てを行った。消毒して薬を塗りガーゼ、または絆創膏を張った。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えるとしたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

私は避難所で生活しながらのボランティアであったため、避難所のニーズが分かった状態で活動をしていた。これが被災者という立場ではなく、支援者として外部からボランティアに入る場合には、きちんとした心構え(避難所生活や被災者への配慮、自身の安全等)が必須だと私は思う。避難所生活というものとは多大なストレスを人々に与える。相手がなにが辛いと思っているのか分からない状態で話を聞いても十分に理解することができず、逆に不快感を与えてしまうかもしれない。助けたい、という気持ちは大切だが、その気持ちだけで来てしまっただけで避難所で迷惑をかけてもいいけない。私は、ボランティアでこんなことをしました、という活動内容はそれほど重視しない。確かに参考になるかもしれないが、災害によってその支援内容は変わってくるものであり、活動内容は大抵、その場で指示(例えば瓦礫を運んで、だとか子供の世話をして、だとか)されるからだ。それよりも、「体育館は冷えて寒いうえ床で寝ては体が痛むだろう、あのおばあさんに簡易ベットを作ろう」といった、気遣い・気づきこそが大切なのだ。そしてこれは人から話を聞くよりも体験したほうがずっと理解できる。お年寄りがどれだけ生活に苦勞するのか話を聞いてもいまいピンとこないが、お年寄り体験で狭い視界や曲がらない膝などを体験すると、その辛さがよくわかる。同様に、辛い避難所体験の話聞いても、体験したことのない人にはあまりピンとこないが、体育館で薄い毛布 1 枚をまとって寝てみると 1 日で体が痛み、その辛さをよりリアルに想像できる。この体験は、自身が被災者になった時にも役立つことのできる経験であり、同時に自身が支援者として避難所に入った時にも役立つことのできる経験である。ボランティアとして自身が避難所で生活する際のトラブルを減らし、また被災者の気持ちを理解する手助けにもなる。避難所のニーズに応じた活動を行うことができるのだ。私は、避難所での生活・避難所でのボランティアという体験を、彼らにも実際に体験してもらうという形で伝えたい。その際に「避難所ではこれが役に立った」という話もし、それも実際に使ってみるとより良い。熊本地震の日に防災訓練とその体験生活を一緒にしてみるのはいかがでしょうか。体験してみると、実際に避難所に行った時に役立つ様々な気づきを学ぶことができる。

# No.02

文学部 コミュニケーション情報  
学科 1年

高山 琳

活動日時 平成 28 年 4 月 22 日~平成 28 年 7 月 3 日  
(実働 54 時間・9 日)

活動場所 熊本市災害ボランティアセンター 花畑広場  
熊本市災害ボランティアセンター サテライト  
熊本市災害ボランティアセンター 動植物園駐車場

## 活動内容

4 月 22 日、23 日、24 日の三日間は、グループで被災地に派遣され、ボランティア活動を依頼される被災者の方を募るためにいろいろな地域でポスティング作業という活動を行った。依頼書となる紙を割り当てられた区域のお家に一軒一軒配布するという作業であり、その際に、被災者の方に声をかけるという活動も同時に行った。

5 月 14 日から 7 月 3 日までの 6 日間は、ボランティア活動の運営に携わる活動を行った。私が最も多くの時間行っていたのは、アポ取りという作業である。これは、被災者の方から寄せられた活動依頼とその日活動して下さるボランティアの方々の人数等を調整しながら依頼者の方に直接お電話をして、何日にボランティアにいけそうなのかをお伝えし、依頼された活動内容の確認、活動場所の状況確認等を行う作業であった。またそのほかにも、実際に活動に行っている方からの質問や追加物資の要求などを電話で対応することもあった。また、ボランティアさんたちに活動内容等を説明するというマッチング作業も行ってた。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えるとしたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

私は、自分がどのような活動をしていたかはもちろん、活動を通して、考えたこと、実感したこと、改善していくべきだと思ったことなど、いろいろなことを後輩たちに伝え、それを理解してほしいと思う。被災者の方にお電話をし、ボランティアを派遣するという旨をお伝えした時に「ほんとに来てくれるの?とても怖い思いをしたから、誰かが来てくださるだけでうれしい。」と言って涙を流されていたことや、ボランティアの方が活動をして帰った後に、「本当にありがとう。とても助かったから、活動して下さった方にお礼を言っておいてほしいです。」というお電話を下さったりした。この経験から、私は、災害というものとは人々に与えた影響の甚大さを感じたとともに、自分たちボランティアが被災者の方のためにできることは多く、自分が思っている以上に私たちを必要としてくれているのだということを実感した。また、災害の起こった日から、時が経つにつれてボランティアとして活動してくれる方の人数が確実に減少していているのを目の当たりにして、それは、ボランティア活動を行って下さる方への、対応、感謝の伝え方などを改善していくことで、これからも活動を続けていこうという思いを持ってもらえるのではないかと考えた。このような多くのことを、後輩たちに伝えると考えると時に、なかなか難しいことだなと思った。私が同じ立場だったとしたら、講演会や報告会が開かれるという案内を受けても正直それに参加してみよう!とは思わないのではないと思う。そう考えると、人を集めて、そこで話を聞いてもらうという形式では、多くの人に伝えるのは難しいということになる。そこで私は、SNS という現代の大学生の生活に深く浸透しているサービスを利用していくと効果的なのではないかと考えた。例えば、Twitter で災害支援活動の報告を行うようなアカウントを製作し、そこに様々な学生の活動報告を掲載するというものである。しかし、それだけでは閲覧者が増えないと考えられるため、動画や写真を豊富に用いて人が見たいと思う配信にするような心がけるべき点は多くあると思う。

# No.03

文学部 コミュニケーション情報  
学科 1年

小村千紘

活動日時	平成 28 年 5 月 1 日 ~ 平成 28 年 7 月 3 日 (実働 108 時間・17 日)
活動場所	熊本市災害ボランティアセンター東区サテライト 熊本市災害ボランティアセンター動植物園駐車場 みらい長崎ココウォーク前

## 活動内容

熊本では、主にボランティアセンターの運営ボランティアを行いました。詳しい仕事内容としては、ボランティアに来てくださった方々と、ボランティアを必要とされているお宅のニーズを見ながら必要人数や必要資材を考え、マッチングするというものです。震災が起こってすぐのころはがれき処理などが多く、男手が必要なことが多かったのですが、時がたつにつれ力仕事が大いぶ減り、家の中の片づけのニーズが増えてきたため、男女の比率を考えるのが難しかったです。日がたつにつれボランティアの数が減ってゆき、人手が足りなくなったときには自らも実働として被災された方のお宅に伺い、掃除や片付けの手伝いをさせていただきました。地元に行ったん帰省した際には、熊本の大学に通う長崎出身の大学生の方と一緒に募金活動も行いました。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えるとしたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

私がまず伝えたいことは、熊大には誇りになる先輩がいるということです。私は震災が起こってすぐに熊大の体育館に避難していました。入学したてでまだ周りのこともほぼ何も知らないような状態で被災し、困り果てていたのですが、熊大に避難すると、そこには自らも被災しているのに、どんどん集まってくる地域住民の方のためにと体育館を開放し、避難所を運営する先輩方の姿がありました。私は運営に直接かかわったわけではなく、少しお手伝いをさせてもらった程度なので、自らの経験とっていいのかわかりませんが、今まで経験したことのないような災害に遭い、自らも怖い思いをしているはずなのに、周りの人のために動けるような先輩がいること、そんな熊大に入学できたことを新入生には誇りに思ってもらいたいです。後から聞いた話なのですが、熊大の体育館やグラウンドは正式な避難所ではなかったそうです。そんな中で自主的に避難所を開設し、運営を行っていた先輩方はすごいと思います。

自らの経験から伝えたいことは、被災地を長い目で見ていくことの大切さです。私はいける土日にはボランティアセンターに足を運び、ボランティアを行っていたのですが、時がたつにつれて、目に見えてボランティアに来てくれる人の数が減っていくのを感じていました。時がたつと注目も薄れ、あまり人々の関心が向かなくなってしまいます。それは仕方のないことなのかもしれません。でも、ボランティアの手を必要とされている方はまだたくさんおられます。長い目で被災地を見て、支援していくことが大切だということを伝えたいです。かくいう私も、忙しくなることを理由にボランティアから遠ざかってしまっていました。しかし、あるご縁があって関西で行われたボランティアを行う学生のギャザリングに参加させていただいたときに、関西や東北の学生が熊本の復興のために動いてくれているのに現地にいる自分は何をしているのだろうかという気持ちになりました。そこから、ボランティアの団体を立ち上げることになり、現在活動を行っています。新入生にも興味を持ってもらえたらと思うので、団体の広報とともに、ボランティアの大切さを新入生に伝えたいと思います。

# No.04

文学部 コミュニケーション情報  
学科 1年

澁谷明佳

活動日時	平成 28 年 4 月 16 日~平成 28 年 7 月 3 日 (実働 97 時間・13 日)
活動場所	熊本大学体育館 / 宮崎県での募金活動 / 東区ボランティアセンター / 阿蘇YMCA / 益城町の避難所

## 活動内容

熊本地震直後、熊本大学に避難していた私は学生ボランティアが体育館の中で募られたためボランティアをすることにしました。体育館では、トイレ掃除や配膳のお手伝い、留学生の支援を行いました。そして地元に戻った1週間は募金活動を行いました。また熊本に帰省し、5月1日から東区のボランティアセンターの運営に携わることになりました。ボランティアセンターの運営はボランティア要求する方とボランティアをしに来た方を結びつける仕事ですが、ニーズと実際の活動者の数を調整したり、活動者がけがをしないように支援したりと予想以上にハードなものでした。しかし、ここでの活動によって運営の仕方やボランティアの大切さ、そして何より被災者の笑顔や県外からボランティアをしに来てくださった方との出会いは忘れられません。このボランティアは約2か月間学校が再開してからも週末を使って続けていました。他には、YMCAとして阿蘇での泊まり込みのボランティアを行ったり、益城町での避難所運営のボランティアを行いました。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えるとしたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

私は、ボランティアを行ってきた人達の中では珍しいと思いますが様々な種類のボランティアをやってきました。多くの人は、学習支援ボランティアなどを継続的に行っています。確かに私は、ボランティア活動では「継続」といことが最も大切だと思っています。しかし、様々なボランティア活動を行ってきたからこそ多くのことを学べ、そして被災者に寄り添うことができ第2の支援について考えることができたのだと思います。活動内容としては避難所運営に、ボランティアセンターでの運営、そして阿蘇の被災した子供たちとの交流や学習支援ボランティア、そして仮設住宅でのガラスづくりをしました。それぞれ対象者は異なり幅広い年齢層の方と活動を通して関わってきました。そして最近では、そのような活動を通して今私にできること、必要とされていることは今度は「継続」的に行っていきたいと考え、ボランティアを行う団体を立ち上げました。そして、これから集まってくれたメンバーとともに西原村と益城町を拠点として活動して予定です。そんな私は、熊本大学に入学してくる後輩たちにボランティアと言っても幅広く様々なボランティアがあること、そして何より自分のボランティアに関する考えやボランティアの楽しさをプレゼンや映像、写真を使って伝えたいです。私自身、ボランティアと言えはがれきの撤去だけだと思っていました。しかし、実際自分が被災者になり瓦礫の撤去だけではなく避難所運営を行う人がいて、第二の支援として足湯や学習支援ボランティアなど多くのボランティアがあることを知りました。そしてボランティアと言うものは、別に素晴らしいことではなくボランティアを通して多くの人と出会う場でもあると思いました。そして何より、学生であっても出来ることはたくさんあり、もっと言えば学生だからこそ出来る支援があるのだと気づきました。熊本大学に入学して来る人の多くは熊本地震を経験していない人、実際に被災した家や避難所の様子を見たことがない人だと思います。だからこそ、活動した人たちが様々なボランティアの仕方を発表し興味を持ってもらい熊本の復興のために力を注ぎたいと思ってもらえる会ができればいいのかなと思っています。



# No.05

教育学部  
地域共生社会課程 1年  
椎葉大和

活動日時 平成 28 年 4 月 16 日 ~ 平成 28 年 5 月 6 日  
(実働 55 時間・13 日)

活動場所 熊本大学 / 済々黌高校 / 託麻原中学校

## 活動内容

私は上記に示した期間において、主に避難所となっていた活動場所で避難者の方々への食事の配給、トイレ清掃、生活用水の運搬、物資の整理、見廻りなどに従事した。大学入学後一人暮らしをしており、地震後すぐに大学へ避難していたものの、発直後から避難所運営を取り仕切る学生団体の先輩方の姿に感化され、自身も何か協力できることをやりたいと思ひ友人と共にボランティア募集に参加した。初めは人数の足りていなかった熊本大学及び託麻原中学校でボランティアに取り組み、のちに済済黌高校へと移動し同じような境遇でボランティアに参加していた一年生と共に活動をした。

活動に取り組む中で、人の温かさを知ると共に、一人じゃできないことも、同じような意思をもった個人が集まることでできることがたくさんあるのだということをも身を以て感じる事ができた。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えたとしたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

私は活動に取り組む上で、人の温かさ、繋がり与管理の重要性について知ることができた。避難所での生活の中で、ボランティアに取り組む私たちを少なからず励ましてくれる方々がいた。私たちが配給で食べ物を手渡したり、掃除をしたりしていると「本当にありがとうね。」と言葉をかけていただいたことがなんどもあった。そんな何気ない言葉でたくさんの勇気をもらい、また明日も頑張ろう、と思うことができた。自身も避難所で辛い避難生活を送っている中で、僕たちに言葉をかけてくれるそんな気遣いで大いに救われた。ボランティアというのは、「困っている人を助けたい。」という思いから取り組むものではあるが、何の訓練も受けていない私たち一般人にとっては体力的、精神的にもハードなものだと思う。だからこそ、モチベーションの維持や精神面でのケアも欠かすことのできない。当時は、人から感謝されるのが唯一のやりがいであり、自分にとって大きな自信になっていたと感じる。また複数の避難所を経験し、避難所での管理体制によってこんなにも質の差が生まれるのかということに気づくことができた。熊本大学など、物資の管理や衛生面の維持などケアが行き届いている、しっかりとした管理体制が整っているところでは満遍なく被災者の方に支援ができていたと思うが、小さな公民館など、人手も足りていないような避難所では次々届く物資も山積みになされたまま、衛生的にも問題があるような避難所もあるというニュースを目にした。きちんとしたマニュアルがない中で、一から管理体制を作り上げるのは本当に難しいことではあると思うが、そのマネジメントが被災者へのケアの充実度に顕著に表れていた。このような経験を後輩に語り継ぐとしたら、今回どのようにして管理体制を作り上げたのか、どんな管理をしていたのかをしっかりと文書化し、マニュアル等を作り上げることが重要だと思う。避難の時にどういった行動を取れば良いかなどは、よく目にするにはあるが、避難所運営側の手引きはなかなか目にする事ができない。今回の震災で知り得た経験をもとにマニュアルを作成し、新たに教養科目等の授業で避難所実践など、避難所での運営側の方法について実践的な取り組みを行った方が、今後また同じようなことが起こった際に迅速に動けるという面でも役に立つと考える。

# No.06

教育学部 中学国語学科 1年  
友成勇太郎

活動日時 平成 28 年 4 月 17 日 ~ 平成 28 年 5 月 7 日  
(実働 93 時間・15 日)

活動場所 済々黌高校 / 竜南中学校 / 託麻原小学校 / 大分県杵築市のサンリブ

## 活動内容

【済々黌高校における避難所運営】物資の運搬や搬入、配給の手伝い、見回り、トイレの水の管理など。震災後すぐになにかできることを探していたら、SNS での呼びかけがあったので、参加した。済々黌は非公式の避難所であり、ボランティアもすべて学生により行われていた。水道が流れず、トイレ用の水の運搬などが非常に重労働だった。夜間の見回りもしなければならなかったため、寝る時間はほとんどなかった。最初は物資が少なく、配給もろくにできなかったが、SNS を使い、情報を拡散すると、物資が大量に来て、その物資をほかの避難所にも送った。

【地元大分県杵築市における街頭募金活動】スーパーマーケットの入り口に立ち、復興支援の募金を呼び掛けた。現在熊本で暮らしている、地元と一緒にいる学生が集まって、募金活動を行おうということになり、人が集まりそうなスーパーマーケットで募金活動を行った。崇城大学の2年生が中心となり、3日間行った。3日間で30万円集まり、熊本市役所に送った。【教育学部の学校支援ボランティア】教育学部の指示に基づき、それぞれ配属先の学校に行き子供たちに勉強を教えたり、一緒に遊んだりした。竜南中学校では、毎日8人程度の子供が来ていて、勉強をしたり、外で遊んだりした。託麻原小学校では毎日15人程度子供が来ており、主に勉強を教えていた。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えたとしたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

私は、済々黌でボランティアをしていた時に、物資が足りていない旨や、ボランティアの人数が足りていない旨を twitter に投稿した。すると、そのツイートは急速に拡散され、「ツイートを見た」という人が物資を届けてくれたり、ボランティアに来てくれたりした。このように、SNS は使い方によっては強力なツールになるのだ。大学生はツイッターから犯罪につながっている人も多くいる。そのような人たちに、正しい使い方を教えるいい機会だと考える。私のツイートのほかにも、もっと拡散されたツイートがネット上にはたくさん残っている。そのようなツイートを見せることによって、SNS の力や、正しい使い方を教えることができるだろう。さらに、震災時の SNS を特集した講義を行うことによっても、後輩に震災について、伝えることができると思う。

次に、リーダーシップ、フォロワーシップの重要性だ。避難所において、この2つが非常に重要だと感じた。避難所と言えば、2人のリーダーに、残りのボランティア全員がしがたがって、統一された動きができたからこそ、学生だけでの運営ができたのだ。具体的に言うと、リーダーがボランティアの仕事を分け、ひとりひとりを割り振って仕事を行わせていた。もちろん各自、休む時間も作っていた。リーダー2人は夜通し起きて作業をしていた。このように、リーダーが自らやるべきことを実践しないと、下に就く者たちはついてこないと考える。これは、普段の学生生活にも言えたことだと考える。大学におけるサークルなどには教員は基本的にかかわらない。だからこそ、学生にはリーダーシップやフォロワーシップが必要なのだ。それを後輩に伝えたとしたら、ボランティア時のシフト表の写真などを見せ、私たちの口から語って、さらに、実際にリーダーをしていた方に話を聞いて、その話を聞くのもいいだろう。

そして、震災を体験してもらうことも有効だ。震度7を体験できる装置を使って、実際に震度7を体験してもらえば、地震に対して、よりわかりやすく伝えることができるし、体験した側もイメージしやすく、興味も沸くだろう。

さらに、最も伝えなければいけないことがある、それは、避難所や被災地域の現状だ。テレビやメディアが報道しているのはほんの一部であり、実際の被災地をもっと知る必要があると考える。そこで重要となってくるのが、実際の避難所の写真や、我々ボランティアの話だと考える。そこで、各地のボランティアから写真を集めたり、有志を募ったりして、新入生向けにプレゼンテーションを行うような講義を開くのも伝えるのに有効だと考える。さらに、震災関連のボランティアに後輩を誘って一緒に参加することも有効であると思う。実際に自分が動いた方が、震災をより実感できるだろう。したがって、ボランティアを募集しているのを発見したら、後輩と共に参加することが大切なのである。

熊本震災を、後世に伝えていくことは、非常に重要であり、実際に経験した私たちが行う使命であると、そう考えている。

# No.07

教育学部  
小学校教員養成課程 1年  
浅井敬大

活動日時 平成 28 年 4 月 19 日 ~ 平成 28 年 4 月 30 日  
(実働 120 時間・11 日)

活動場所 済々黌高校

## 活動内容

主な活動としては、避難所の運営・救援物資の管理をしていた。具体的には、数多くの救援物資が個人、有志による民間の団体、もしくは自衛隊・消防団から済々黌高校に届いてくる。それらの物資を避難所として使用していた体育館まで協力して運搬し、食料品類、生活用品等にこと細かく種類分けをして、整理し、個数を数え、管理用のパソコンで記録・管理していた。食パン・菓子パンなどの保存食ではないものに関しては、賞味期限を調べるとともに、期限のきれたものは提供しないことを徹底した。

また、避難者の数を、物資の配給前にカウントし、その数を踏まえ、避難者に対して配給を行っていた。そのとき、極力栄養面に関して偏りがないようにメニューを考えたりもした。この他には、水道が止まっている時期は、学校のプールから水をくみとる作業もした。そして、ウェットティッシュや、アルコール消毒の呼びかけを徹底し、風邪などの感染症に避難者がかからないようにした。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えといたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

私たち熊本大学の学生に限らず、熊本の多くの学生が災害支援活動として、避難所運営・救援物資の運搬・解体したがれきの撤去・避難者への聞き取り等、さまざまな場所・地域で活動してきて、今も活動している人もいます。私は避難所運でしたが、この経験はなかなか体験できるものではない。だから、これから熊本大学に入学する後輩にはぜひ伝えるべきであると思う。

私が行った活動の中で伝えたいのは、避難所の運営方法（マニュアル）であるには避難所がたくさん設立されており、それぞれの方法で運営されていたと思う。その中でよかったこと、わかったことがいろいろ出てきているはずである。それらを聞き取り、まとめて、「熊本の学生による避難所運営マニュアル」として残しておくべきである。私がこの震災を経験して思ったのは、避難に関しての知識（地震が起きたら机の下に隠れる、火は消して、ドアを開けて避難経路を確保する等）は少なからず知っていたのだが、実際に震災が起きたとき、避難所を運営する方法などはまったく知らなかった。そもそも、避難所の運営は県や市の職員が行うと思っていた。そのため、友達に声をかけられ、済々黌高校に避難所運営に向かったのだが、そもそも、避難所の運営は県や市の職員が行うと思っていたために驚いてしまった。ただ、自分が活動に参加しはじめたのは本震が起きて三日がたったため、避難所の運営体系はすでに出来上がっており、自分はそれに従って活動してきただけである。どこの避難所も運営体系を作り上げるのに苦労しており、済々黌高校でもいろいろと試行錯誤を重ねたと話を聞いた。この経験を踏まえると、マニュアルを作成するのは必要であると思う。さらに、熊本大学の授業として、地震が起きたとき、学生ができることは何があるのか、避難所の運営方法などをして、災害が起きたときに対しての知識を教えていくのも 1 つの手段なのではないだろうかと思う。

# No.08

教育学部  
中学技術学科 1年  
島村健佑

活動日時 平成 28 年 4 月 16 日 ~ 平成 28 年 4 月 30 日  
(実働 180 時間・15 日)

活動場所 出水南中学校

## 活動内容

支援物資の搬入や体育館入り口でのいわゆる受付というものをした。炊き出しの準備やアナウンスなどもした。エコノミークラス症候群も危惧されていたので運動場に車中泊をしている方にも届くように外に向けてのアナウンスも行った。この避難所では年配の方が約 9 割を占めていて、子どもは 5,6 人ぐらいしかいなかった。年配の方の自分のことしか考えていない行動に頭を悩ませながら運営を行った。喧嘩をされる方もいたのでその時の対処や中学校の先生への報告など無駄な対応にも追われた。またたりない物資など（私の避難所では主に年配の方が多かったので入れ歯系統）を外部へ連絡して要請したり、中学校の先生に伝えたりするなど多岐にわたる活動をした。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えといたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

避難所運営をする機会なんてそうそうないと思う。私も実際初めての経験だった。まず伝えたいことは、人間は物資がないという状況に陥ると自分だけ助かれば、後の人はどうでもよいという醜い一面をみせるということである。本震が起きた 4 月 16 日の夜は、まだ物資が全く届いていないときであった。まだパニックになっていた時だったかもしれないが、ほんの少しの物資を求めて我先がという状態だった。「私のものよ」と取り合いになる場面も多々あった。「物資がたりないので 1 人一回でお願いします」と言っても平気で何回も取りに来る人もいた。注意すると「まだ 1 回目」と言って逆に怒られた。だいたい 2 回も並ぶような人は、もともと避難所の中でも目立っている人がやることである。そういう人は気が強いし、頑固なので非常に対応が困る。割合的には 1 つの避難所に 3 人いるかないかということである。また私の避難所は年配の方が 9 割以上を占めていて、強いて言えば老人ホームという感じであった。ここでの注意点もある。年配の方はもらえるのはとりあえずもらっとうという精神があるということである。

「体ふきシートを配ります」といったとたんにもまずとりあえずみんな並ぶ。その後に巡回していたら、さっき配った体ふきシートを使っているひとなんてほんの数人であった。後の人は開けてすらいなかった。次の日も新しいひとが避難所に来たりしていたので、体ふきシートを配るアナウンスをした。そうしたら案の定、昨日開けてすらいなかった人たちがまた取りに来るのである。歯ブラシや歯磨き粉も毎日新しいものを取りに来る。一体なぜなのだろうか。これらの経験から私は人間は追い込まれると自分のことしか考えなくなるのだなと感じた。しかし私たちボランティアをする方はそうあつてはならないのである。人のこと第一、自分のことは後回しにしないといけないのである。このことをどうやって後輩に伝えるのか考えたが、やはり写真や今私が書いている文字では伝わらないと思う。

1 番良いのはやはり体験する。その次に良い方法は動画なのではないだろうか。やはり静止画をみるよりも生きている動画を見る方が状況をつかめやすい。そこで私が 1 番良いと思うのは、1 番人がくる受付にビデオカメラを設置しておきそれを今からの世代に残して、今後また同じようなことが起きたときに迅速に対応できるようにするべきではないだろうか。私は 2 週間ほどの避難所運営を通してそう感じた。

# No.09

教育学部  
中学校技術学科 1年  
久保太志朗

活動日時 平成 28 年 4 月 20 日 ~ 平成 28 年 5 月 15 日  
(実働 120 時間・20 日)

活動場所 菊南病院 / 益城町 / 長嶺小学校 / 長嶺中学校 /  
託麻南小学校

## 活動内容

菊南病院では、医師、看護師の方々のお子さんが、遊ぶ場所は震災によってなくなり、友達ともなかなか会えない状況下で、元気がありあまりストレスが溜まっていくのを防ぐため、そのお子さんたちと病院のホールでいろいろな遊びをしました。益城町のボランティアでは、震度が大きく家屋が崩壊していたり、生活物資が足りていなかったりしていたので、家屋の剥がれ落ちた瓦の撤去やがれき撤去をし、支援物資を配送したりしました。また、日本財団のボランティアで、各家庭の現状を把握し、その状況に最適な支援を施すために実施された各家庭状況聞き取り調査をし、不足しているものや、県に行ってもなかなか対応してもらえない不満などを聞いて回りました。長嶺小学校、長嶺中学校、託麻南小学校では、支援物資が多く届き、体育館に保管され、そこから配送した取りに来ていただいて、配布したりしていました。それを円滑に行うために、支援物資の仕分け整理も行っていました。また、菊南病院同様、元気のあり余った子供たちと遊ぶこともしていました。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えるとしたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

私の家庭では、今回の熊本地震による震災での被害はなかなか小さいものでした。食器は割れはしたものの、家具が倒れることもなく、家屋の外装、内装の損傷もほとんどありませんでした。それでも、水が止まってしまったことでトイレが流せない、お風呂に入れない、食器を洗えないため料理をすることもままならない状況下に、とても苦しみました。そんななか、比較的早めに水が戻ってきたので、益城町などの、被害が大きい場所に出向き、自分にできることはないかと思っていました。そんなとき、父の知り合いが菊南病院で働いており、子どもたちが元気過ぎて手に負えないので相手をしてほしいとの連絡がありました。私はそのとき、子どもたちは遊べる環境がなくなり元気を発散する場所がなくなっていることでとても困っているということなんて、考えてもみなかったことだったのでとても驚いたのと同時に、考えが及ばなかった自分を恥ずかしく思いました。そんなこともあり、菊南病院でボランティア活動に従事していました。最終日には子どもたちから感謝の手紙をもらったり、様々な感謝の気持ちをいただいて、微力ながら、役に立ててよかったと心底思いました。その後、私はボランティア活動に励むことを決心し、益城町や、地元の小中学校におもむき、様々なボランティア活動を行いました。自分が思ったのは、やはり、益城町の被害は甚大なもので、家屋の被害が壮絶なものでした。住民の方のお話を聞く機会があったのですが、とても怖かったということをお聞きしました。しかし、そんな中でも、「ボランティア活動大変だね、ありがとう。」という言葉をかけてくださったり、時には「これ持っていきなさい。」と、トウモロコシをくれる方がいたり、とても強く、温かい人たちがばかりだと思いました。そういうことを経験すると、自分のできることはとても小さなことかもしれないけれど、さまざまな方に感謝されることがあり、やってよかったなと思えました。このような体験を、後輩たちに、入学資料の一角にでも何人かの方の体験談を掲載し、ふとした時にでも見てもらうことで、少しずつボランティアの意識が芽生えていくのではないのでしょうか。

# No.10

教育学部  
小学校学科 2年  
田代早紀

活動日時 平成 28 年 4 月 19 日 ~ 平成 28 年 5 月 2 日  
(実働 50 時間・6 日)

活動場所 うまかな・よかなスタジアム  
熊本市災害ボランティアセンター

## 活動内容

うまかな・よかなスタジアムでは、支援物資の仕分け作業を行った。大西市長が、ツイッターで呼びかけたために多くの学生ボランティアが集まり、多くの人数で仕分け作業を行ったので仕事はあまり多くなかった。熊本市災害ボランティアセンターは花畑公園に設置されたボランティアセンターで、ここでは様々な場所からボランティアに来てくれる人へのボランティア内容の説明や誘導などを行った。私はボランティアセンターの運営側を行ったボランティアセンターが設置される前日に集まり、説明を受け、私はオリエンテーションという班になった。この班は、ボランティアをしに来てくれた人たちを50人のグループに分けて、説明を受ける場所へ誘導し、ボランティア内容の説明をするというグループだった。私は主に何千人と集まってくれた人々を整列してもらい、50人ずつに分けて誘導する係りを行った。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えるとしたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

まず、ボランティアを行って思ったことはボランティアの種類は多岐にわたることだ。ボランティアと言えば、炊き出しを行ったり壊れた物の片付けや修理を手伝ったり、支援物資を調達したりなどの行動がイメージとしては湧きやすい。しかし、今回災害ボランティアセンターで運営のボランティアをしてみても、何かを行うにも裏方の仕事というのは大切だと感じた。実際、このボランティアセンターのボランティアをする学生がいなかったら、確実に事は進まなかったと思うので、とても良い経験が出来たと思う。また、学生ボランティアが多かったため様々な学校の人と知り合うきっかけとなり、それぞれの地震直後の頑張りや、ボランティアセンターで動くテキパキした行動などを見ることが出来てまたそれも良い刺激となった。以上のことから、私は後輩達へボランティアをするにも、きちんと裏にはそれをバックアップしてくれるボランティアの人がいるのを忘れてはいけないということを伝えたい。仕事やバイトにおいては考えやすいことではあるが、ボランティアではちょっと忘れがちになってしまう裏方の仕事を今回は出来て、それを真に感じた。これを私は SNS などを使って後輩達へ伝えていきたい。やはり私たち学生は SNS が幅広く利用されていて、Twitter だけでなく Facebook や Instagram など様々なものが活用されている。実際今回の地震でも様々な情報をこの SNS から得た。やはり、これを利用するのが1番だと考える。またこの SNS を利用したいもう一つの理由として、SNS は大きなニュースや派手な事柄などを載せがちである。今回私たちが行ったボランティアセンターの運営のボランティアは確かに派手な事柄ではないかもしれないが、だからこそ SNS を使って発信していきたいと思い提案する。

# No.11

教育学部  
生涯スポーツ福祉課程 2 年  
内谷夏貴

活動日時	平成 28 年 4 月 16 日～平成 28 年 5 月 24 日 (実働 50 時間・21 日)
活動場所	熊本大学 / 出水小学校 / 熊本市社会福祉協議会 / 西原 村立河原小学校 / 益城町総合体育館 / 御船町

## 活動内容

熊本大学：グラウンドにブルーシートを敷き、またグラウンドの避難者がいなくなったらブルーシートの撤収、グラウンドの片付け・掃除。高齢者・体の不自由な人・子供を体育館へ誘導、体育館での避難所の設営・運営

出水小学校：物資運び、廊下・トイレ掃除、配給手伝い

社会福祉協議会：災害ボランティアスタッフ【ボランティア誘導・ボランティア要請受付・地図探し】

西原村立河原小学校：体を動かす機会の少ない高齢者に体操を教える・遊ぶ場も遊んでくれる大人もいないため避難している子供と遊ぶ。

益城町総合体育館：避難所では個人の空間がないので個人的空間を作るためのパーティションづくり・体育館の床だと硬いため、少しでも衝撃を和らげるための段ボールベッドづくり

御船町車中泊現状調査：車中泊をしている方にアンケートを取り、なぜ車中泊を続けているのかを調査

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えたいとしたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

災害ボランティアをして大切であると考えたことは、災害が起こる前の地域づくりが大切だと感じた。災害が起こる前に地域でコミュニティを作っておくことで、災害時に近くに住んでいるひとの安否の確認をすることで生存率は高くなるし実際にそういう例がほかの地域でもある。また、災害時には近くの体育館などに避難することが多いと思う。その際に地域のひととのコミュニティがないと、特に最初孤独を感じることになる。ボランティアをしている際にもそういう人を良く見かけることがあった。特にお年寄りなど、家族がいなかったりすると、いつまた災害が起こるか分からない不安もあり、精神的に非常に不安定になる。そのときに、コミュニティがあったら、周りの地域のひとが声かけもできるし不安になることがやすらぐ。そういう点で、災害が起こる前の地域づくりは非常に大切である。

災害時のときの非常食など準備が非常に大切である。ボランティアをしていて、災害が起きた序盤は食べ物なくなり食に困ることがおおいにあった。熊大での避難所運営時には食べ物の配給を学生主導で行っていたが、あまり配ることができず避難をしている方にはつらい思いをさせてしまった。ここで非常食の準備ができていない方におおく配給ができる。また、準備は心構えも非常に大切である。災害が起きたときに、焦った行動は危険を伴う。いつでも心構えしておくことで焦らず、最善の行動をとれるはずである。実際に災害が起きたときに焦って行動をしてけがをしている方もいた。ボランティアをしていてもそういう場面には何度も遭遇した。

このようなことはめったに経験できることではない。しかし、そのことを知っておくことは大切である。それを伝える手段として、私は劇が良いと考える。理由はやはりインパクトが大事であるからである。記憶にしっかり定着させることが大事なので、その演劇は目で見て内容があたまりやすく、残りやすい。このような理由で劇で伝えたいと考える。

# No.12

教育学部  
藤本大護

活動日時 実働 112 時間

活動場所 錦ヶ丘中学校

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えたいとしたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

私は四月十七日から二週間程度毎日朝九時くらいから大体夕方六時くらいまで被災非難民の方々の支援を行いました。場所は熊本市立錦ヶ丘中学校でした。私はボランティア団体などを介することなく人の役に立てるならという一心で動きましたので苦労することもかなりありました。

まず人手が圧倒的に足りないということです。私を含めたボランティアは全員が近所に住む大学生で構成されていて、市役所の方が 1 名責任者としておられました。

することといえばざっくりと申し上げるなら被災されている方が避難されている教室の掃除及び毛布などの取り換え、支援物資の受け渡しと管理、朝昼晩の食事の準備などです。こういったボランティアのなかで重要だと感じたのは体制を整えることの重要性ではないかと考えます。体制が整えば食事などの準備でもシステム化できるので少人数でもそれなりに運営していくことができます。逆に体制が整っていないのに人数だけ増えても全く機能しないどころか足手まといになってしまうと考えました。以上の点をふまえて後輩には体制を構築することの重要性を伝えたいと思います。方法についてですが、発言する機会が与えられるならば後輩たちに伝えたいと思います。やはり直接自分の言葉、自分の声で伝えるのが一番リアルが伝わるのかなと思います。ネットや文字で伝えようとしても興味がある人間にしか伝わらない気がしてなりません。したがって授業などの時間で発言の機会をいただくのが一番生の声、生の経験を伝えられると私は考えています。

# No.13

教育学部 数学科 3年

山田裕崇

活動日時	平成 28 年 4 月 18 日 ~ 平成 28 年 4 月 30 日 (実働 90 時間・11 日)
活動場所	熊本大学体育館 託麻原小学校 うまかな・よかなスタジアム

## 活動内容

熊本大学体育館でのボランティアは、毎朝避難されている方の出すゴミを収集することから始まり、その後は朝食・昼食・夕飯の配膳準備や各地からくる救援物資の仕分け、避難されている方に救援物資を渡す深夜の受付、トイレなどの清掃を行った。私自身が大学へ避難していたためこのボランティアはほとんど毎日おこなっていた。

託麻原小学校へは、主に熊本大学体育館でのボランティアの空いた時間に個人で行き、託麻原小学校でボランティア活動を行っている人の手伝いを行った。内容としては清掃、配膳、避難者の点呼が主であった。初めは、ボランティアの人数が少なく体力的にも辛かったが、震災数日後に熊本学園大学の寮生が手伝いに来てくれたため、チームでボランティアを行うことができるようになり環境もかなり改善された。

うまかな・よかなスタジアムでは、全国からくる救援物資の仕分けを行った。ここでは次から次へと救援物資が届くため休憩時間などはなく昼から長い時は 23 時まで仕分けを行っていた。とてもきつくはあったが、熊本市市長から激励の電話をいただき、皆はげましあいながら活動を行うことができた。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えたとしたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

今回の震災は、多くの方が被災され、家や大切なものを失った人やケガをされた人、さらには命までも奪われた人もいる大災害と呼べるものであった。失うものも多かった一方、震災やそのボランティアを通して、人の優しさや温かみ・絆・普段の生活のありがたさに改めて気づくことができたのも事実であると私は考える。震災を実際に経験した我々には、この経験で失ったものばかりではなく、得られたものがあつたことも後輩達に伝えていく必要があると考える。

その中でも私が後輩に特に伝えていきたいと考えるのは、普段の生活のありがたさである。私たちは普段、蛇口をひねれば水が出るし、電気のスイッチを押せば部屋が明るくなる。普段の私たちにとっては極々普通のことである。また普段、車でガソリンスタンドへ行くと必ずガソリンを入れることができるし、小腹がへってもコンビニに行けば何かしらの食べ物にありつくことができる。これも普段の私たちにとってはあたり前のことである。しかしながら、震災はこのあたり前があたり前でなくなってしまう。水・電気のライフラインは途切れ、トイレの水は流れないし水も飲むことができない。ガソリンを入れようとしても、ガソリンが売り切れる。コンビニの中が売り切れて空になる。日常が非日常になってしまうのが震災であると私は考える。

普段の生活のありがたさを知り、日常は簡単に非日常になりうるということを私は後輩に伝えていきたいと考える。そして、このことを知ることで日頃から災害に備えるという意識を芽生えさせることができると考える。

これを伝えるためにも、大学で今回の講演会のような活動をどんどんしていき、その中で震災を実際に経験した学生が、後輩に自分の震災時の経験を話す機会を増やしていくべきだと考える。この他にも震災を経験したたくさんの学生に、震災時の行動や心境を書き留めてもらい、冊子にするなどしていつでも自由に閲覧できるようにするというのも、後輩のためには良い考えなのではないかと考える。

# No.14

教育学部  
小学校教員養成課程 3年

菊池 豊

活動日時	平成 28 年 4 月 16 日 ~ 平成 28 年 4 月 30 日 (実働 180 時間・14 日)
活動場所	熊本大学黒髪北キャンパス体育館避難所 若葉小学校体育館避難所 済々黌高校体育館避難所

## 活動内容

私は熊本大学の大学祭である紫熊祭の実行委員会に所属しており、地震が起こった際、熊本大学の体育館を避難所として開放し、その運営を様々な学生団体が運営していくことになり、紫熊祭もその一員として参加することになり、私も避難所の運営に加わることになりました。私は紫熊祭の実行委員会の中で会計という役職についており、委員長・副委員長が体育館の避難所運営の本部に入ったため、私が紫熊祭の中でのリーダーとなり、運営に協力してくれた実行委員の体調やなどを配慮しながらシフトを決めて交代で持ち場についてもらう、ということを行っていました。実行委員も被災者であり、仕事をお願いするのは非常につらかったですが、誰一人嫌な顔一つせず、頼んだ役割をしっかりとこなしてくれ、人の温かさを感じることができました。また、そのような我々の活動を見ていたほかの熊大生も自分から何かできることはないですかと声をかけてくれて、熊大生のやさしさ、頼もしさを実感することができました。避難所の運営を学生主体から市役所の方主体に移行してからも、そのまま熊大の体育館に残り、避難所の運営をお手伝いさせていただきました。徐々に落ち着きを取り戻し、避難されていた地域の方も少しずつ減っていく中で、多くの地域の方と仲良くなることができました。避難されていた方が自分の家に帰られていくところを毎日見送らせていただき、どの方からも熊大生はすごいね、本当にありがとうなど、多くの優しい言葉をいただきました。運営に携わることができてよかったと感じた瞬間でした。熊大の避難所の運営が一段落ついてから、近くの済々黌高校や、若葉小学校の避難所の運営のボランティアが少なくて困っているという連絡を受け、そちらのほうの手伝いにも行きました。様々なことを経験し、様々な人たちに会うことができた数日間でした。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えたとしたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

災害支援活動の経験をこれから熊本大学へ入学してくる後輩たちに伝えていくためには、私の場合は紫熊祭の実行委員会に所属しているため、紫熊祭の活動などを通して地震の際の活動などを伝えることができるのではないかと考えています。先日 11 月 4,5,6 日に第五回紫熊祭が行われた際、被災地支援の一環として被災地の食材を用いて模擬店を出店するという企画を行いました。私を含め 10 名程度のメンバーでメニューを考え、被災地の農家の方のもとへ実際に伺い、お米農家の方のもとへ伺った際は田んぼの雑草刈のお仕事のお手伝いをさせていただきました。その様子をテレビ局の方や新聞社の方などメディア関係の方に取材していただき、それらの紫熊祭当日の前の様子と紫熊祭当日の様子を合わせてテレビで放送してくださったり、新聞で記事にして取り上げてくださったりしました。そのようなメディア関係の方々のおかげで熊本大学紫熊祭実行委員会として行った多くの災害支援活動を多くの方に知っていただくことができました。私自身、そのような災害支援活動に携わることができ、人として成長することができました。新しく入学してくる後輩たちにも、大学の授業だけでは決して学ぶことができないような経験ができる、人として成長できる、多くの人々のやさしさやぬくもりを感じることができるということを、メディアの方々などの力を借りて伝えることができればと思います。

# No.15

法学部 法学科1年  
緒方李華

活動日時	平成28年4月22日～平成28年4月27日 (実働48時間・6日)
活動場所	益城町惣領地区 / 益城町役場 / エミナース / 益城町災害ボランティアセンター

## 活動内容

益城町惣領地区では、地震が起きて益城町災害ボランティアセンターというものができ、そこに依頼したいこと(がれきの撤去や部屋の片づけ等)を電話すれば順番にボランティアが駆け付けますよ、というボランティアセンターの宣伝を歩きながら一軒ずつお宅を訪問して行いました。

益城町役場では、自衛隊の方と一緒ににおにぎりを握って配給したり、物資のタオルを大きさや質で分けたり、洋服をメンズ・レディースや長袖・半袖や対象年代で分けたり、おむつのサイズを分けたり、食べ物の種類ごとや大人用・子ども用に分たりしました。また、分けた物資を必要な方に必要な分だけ供給しました。

エミナースでは主に炊き出しの手伝いを行いました。肉や野菜を炊き出し用のざるいっぱいになるくらい切ったり、洗い物をしたりしました。そして、出来上がったのをエミナースに避難されていた方に配給しました。

益城町災害ボランティアセンターでは、私の父が益城町社会福祉協議会で働いていたため父から指示をもらい、ボランティアセンターに来られる多くのボランティアの方を駐車場や受付へ案内したり、本部の掃除をしたりしました。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えるとしたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

私は今回の災害支援活動で様々な経験をして、自分が見たもの、したこと、感じたことを伝えたい。

益城町ボランティアセンターの宣伝で益城町惣領地区をまわったときは、まだ本震から一週間たっていなかったため町の様子を見てとても驚いた。益城町出身の私は普段の惣領の様子を知っていたため、あらゆる建物が倒れ、家が潰れ、道路が見たことのないくらい割れていて、信じられなかった。宣伝をしに行く大切なものだけでもいいから取り出したいと涙を流しながら話される方や、命だけでも助かってよかったとどうにか前向きに気持ちを持っていこうとしている方がいた。

益城町役場では自衛隊の方とおにぎりを一緒に作ったり、物資の仕分けや供給を行ったりする中で、嬉しそうにおにぎりをもらいに来る子どもたちがいたり、物資をありがたいと何度も言ってもらっていく高齢者の方がいたりして、当たり前だった食事や買い物当たり前でできることではないのだと改めて感じる事ができた。また、災害時から休みなく働かされている自衛隊の方や役場の方とても疲れているにも関わらず、町民と笑顔で接しておられたのがすごいと感じた。

エミナースでは、ボランティアで炊き出しを行っている方がいてその方の指示で私たちボランティアは肉や野菜を数えきれないほど切った。エミナースに避難している人だけでもこんなにいるのかと驚いた。食事を避難所にいる人に配る時間になると長い行列ができていて、みんなが食事をどれだけ楽しみにしていたかが伝わった。また、炊き出しをしている方が炊き出しのメニューを2週間分ほど考えていらっしゃるって避難所の方を飽きさせないように工夫されているのが素晴らしいなと思っただし、炊き出しを避難所にいる方も手伝っていたのが非常に驚いた。

益城町ボランティアセンターでは毎日朝早くから夜遅くまで動かれていた社会福祉協議会の方の手伝いをしたが、ボランティアセンターには多くの依頼が来るのに加えて直接物資を届けに来る人もいる。とにかく常に忙しい様子だった。駐車場や受付へボランティアの方を誘導していると、学生から大人まで多くの方がボランティアが来てくださって、自分ができるところを何かしようと同じように思っている人がたくさんいることが嬉しかった。

私はこれらの経験を、自分の口や文章で伝えていきたい。ボランティア報告会では、私が家で避難していたとき、ボランティアをしていたとき、他の人がどんな活動をしていたのかがよくわかり、今後に活かせることが多くあったので、こういった会をまた開いて伝えるのもよいと思う。自分の口で伝えることで、話し方から伝わることもあると思う。また、ボランティア報告会の報告でもあったが、自分の経験を冊子にまとめることも経験を伝える有効な手段だと思った。文章にすることで伝えたいことを詳しく伝えることができると思うし、作ったものはずっと残り続けるため忘れないと思う。このように私は災害時の貴重な経験を報告会や文章を通して伝えたい。

# No.16

法学部 法学科1年  
江村和大

活動日時	平成28年4月19日～平成28年4月25日 (実働48時間・7日)
活動場所	宇土市民体育館 (宇土防災センター、宇土産婦人科医院(すでに廃院)、住吉駅)

## 活動内容

4月19日、市民体育館で募集していたボランティアに参加。午前中は物資の搬入・搬出、紙おむつやティッシュなどを仕分ける作業を行った。昼からは水の搬入が多かった。20日、再び市民体育館に向かい。午前中は、100個ほどのセットで送られてくる土嚢袋を各家庭に広く行き渡るよう、10から20個ずつに分ける作業を行った。その後は物資の搬入作業。16時ごろ市職員の車に乗り込み、宇土市防災センターへ。市民体育館に入りきらない物資、特に水をこちらに搬入する作業を行った。21日、雨が降る中、この日も物資の搬入作業を行った。また、廃院となっていた宇土産婦人科にも出向き、物資の保管場所として使用するために院内の片付けを行った。22日、市民体育館で土嚢袋の詰め替え作業。13時過ぎに物資を宇土市給食センターのトラックに詰め込み、住吉駅前のちょっとしたスペースへ。ここでは住吉地域の方々へ物資の配給を行った。その後市民体育館に戻り、今度はブルーシートの詰め替え作業を行った。23日、この日は午後から出向いたが、夕方までブルーシートの整理を手伝った。24日、ブルーシートの詰め替え作業をしたのち、過剰になった土嚢袋やブルーシートを防災センターに搬入した。25日、午前中、物資の整理等を行った。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えるとしたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

私がしてきた災害支援活動というのは物資の搬入・搬出、仕分けなどという誰にでもできる仕事である。後輩たちの中にもそのような活動をしてきた人は多くいると思われる。しかし、各個人の置かれていた状況というのは様々であろうから、それぞれがどのように過ごしていたか、どのような活動をしていたか意見を交わしあう今回の報告会のような催しは開かれるべきだろう。そういった場がなければ、いろいろな人の体験を聴く、あるいは自分の体験を伝える機会というものがないと感じる。熊大や行政がそのような場を設けてくれるのであれば、それを通じて伝えるのが一番良い方法だろう。

しかし、意見交流会で伝えることのできる人数には限りがある。また、個人でこのような会を開くのも無理がある。そこで、SNSやウェブサイトを活用するやり方が最も身近で簡単だと考える。私のしてきた活動は多くの方がやっただろうことであまり新鮮味はないのだが、熊助組さんや416さんのような学生団体は特色ある取組みをなされているため、彼らの活動をもっと知ってもらいたい。ただ、私自身も彼らの存在は今回の報告会ではじめて知ったから、ウェブページをつくるだけではだめであろう。熊大がホームページに地震関連のサイトをまとめたページを作成したり、地震に関して自分の意見を書き込むことのできる掲示板のようなものを開設したりすると、もう少し認知されやすくなるかもしれない。もしそうしたものが実現可能なのであれば、少し書き込みをしてみたい気も起きる上、報告会のときよりも多くの意見を知ることができると思う。

以上より私は、これから熊本大学に入学する後輩に災害支援活動の経験について伝えるのであれば、第一に報告会のような催しへの参加、第二にインターネット上での意見の共有をするべきだと考える。先ほど、私は多くの方がやっていたことと同じことしかしていないと述べたが、中高生と大学生である私とは思考や姿勢が違ったと思う。大学生だからこそ感じられたこと、考えさせられたこと(例えば、防災拠点のあり方についてなど)を伝えていきたい。

# No.17

法学部 法学科1年  
野田栄明

活動日時 平成28年4月18日～平成28年5月8日  
(実働130時間・12日)

活動場所 益城町総合体育館

## 活動内容

避難所に運ばれてくる支援物資を体育館のサブアリーナに運搬したり、その物資を項目ごとに仕分けしたり、避難者の方に配ったりしました。避難所の衛生管理のため、仮設トイレの掃除や貯水タンクの交換をしたり、食事の配給の前に小さい子供たちと手を一緒に洗ったりしました。益城総合体育館はYMCAのボランティア団体と、熊本ヴォルターズという熊本のバスケットボールチームが運営していたので、基本はその団体の指示に従って行動していました。

支援物資がストップして、ある程度仕分けも終わると、次は避難者の方々への御用聞きを始めました。体育館のメインアリーナは天井が崩壊して避難所として使用できる状態ではありませんでした。なので通路の両端に段ボールベッドを作ってそこで生活する人が多く、その人たちの意見や要望を聞いて回りました。また、益城町総合体育館の駐車場にも、体育館の中に入りきれなかった人たちが、自家用車を持ってきて車中泊していたので、エコノミークラス症候群や病気にならないように注意喚起などをしました。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えといたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

私は熊本大学に入学したばかりの頃に今回のような大きな地震の被害にあいました。震災の時に私は40度の熱を出してしまい、前震と本震の間の日に入院するというアクシデントにも見舞われましたが、熱が下がってすぐに自転車で震源地の益城町に行き、そこで避難所の体育館を見つけていきなりボランティアを申し込みました。我ながら褒めてあげたい程の行動力でした。実際に建物の倒壊まではなかったですが、北区にある実家のほうも被害を受けました。水道を止められて配水車に並んで水を確保したりもしていました。親の心配になるからと益城ではなく熊大でボランティアをしていると言って、毎日自転車でボランティアに向かっていました。被災地は大変な被害を受けており、初日は道路を歩くことすら難しかったです。避難所の環境もまだ整っておらず、やらなければならないことが山積みでした。毎日少しずつこなしていき、五月に入ったころには支援物資もある程度整い、授業も始まるので益城でのボランティアを終えることにしました。

ボランティアを通じて学んだことを後輩に伝えといたら、大きく二つあります。一つ目は、人とのつながりを大切にしたいということです。ボランティアを通して、一緒にボランティアをした人たちと今でも遊んだりするほど仲良くなりました。大学では人と人とのつながりが高校の時よりも希薄になるので、交友関係を広げていくことが重要だと思います。二つ目は、行動力をつけることの重要さです。別にボランティアをすることが重要と言っているわけではありませんし、ボランティアを強要するわけでもありません。ただ自分で考え、それを行動に移すことが大切だといいたいです。自分で決めたことを実行して、それが成功しても失敗したとしても、必ずや自分のためになると思います。大学では高校と違って色々と自分で行動しなければなりません。なので早いうちに自分のことを自分でできるようになっておく必要があります。

さて、ボランティアを通じて体験してきたことをどのようにして伝えていくかですが、今回のような報告会をもっと規模を大きくして開催したり、会報などをつくって配布したりするとよいと思います。また、報告会でボランティア団体が実際に行っているように、HPを作ったりSNSなどを通じて多くの人に知ってもらえるようにしたらいいと思います。

# No.18

理学部 理学科1年  
津留彬斗

活動日時 平成28年4月14日～平成28年4月23日  
(実働65時間・9日)

活動場所 益城町保健福祉センター / 広安小学校

## 活動内容

私は、避難所において、まず初日に、玄関の靴を並べることを自主的にしました。靴を脱ぐスペース近くに避難したのですが、靴が散乱していて特に車いすの人が中に入るのに手間取っていたため、ガムテープで設けられた車いすの通路内に靴が入るのに気づいたら、構外に出して並べるということをしました。

3日目からは、避難所の運営を手伝いました。届けられた物資を受け取り、分別し、必要な人が来たら渡すという作業をしました。また、携帯電話の充電スペースの受付や、自衛隊などから届けられるご飯の配給、トイレ掃除、ゴミ箱の中身の整理、新しく避難所にする小学校の教室の掃除、体の不自由な方を仮設トイレまで付き添う、などの活動をしました。

どれも初めての体験で、不慣れで戸惑ったこともありましたが、徐々に手際よくこなせるようになっていきました。貴重な体験ができました。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えといたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

私がボランティア活動を通して、後輩たちに伝えたいことは二つあります。一つ目は、ボランティア活動を通して、人の優しさ、温かさに触れることができるということです。小学校にて食事の配給の手伝いをしていたのですが、その日の昼食はパンとミニトマト3つだけでした。十分とはお世辞にもいえない量で、3つ渡した後に箱から一掴み分のミニトマトをとっていく人もいました。そういう人を見たときは残念な気分にもなりました。しかし中には、3つのミニトマトを見て、「あら可愛い」と言って、笑顔で「ありがとう」と言って下さる方もいらっしゃいました。また、私は避難所で体が不自由なおじいちゃんを仮設トイレに連れて行くお手伝いもしました。何回かお手伝いをさせていただくうちに、パートナーであるおばあちゃんと3人で仲良くなることができ、お菓子を頂いたこともありました。何よりも、「ありがとう」と言って下さる笑顔に、頑張ろうと元気づけられました。ボランティアをして喜ばれたときの嬉しさは、格別なものだと思います。二つ目は、私の反省点について伝えたいです。送られてきた物資の数には限りがあるので、必要な方により多く提供できるように、渡すものにルールを定めていました。例えば、手拭き用のぬれティッシュは小さい方(10枚程度)から渡す、紙おむつは一回につき1人7枚まで、というようなものです。ある日おじいさんが、歯磨き粉を受け取りにやってきました。私はルールに従い、小さいタイプの歯磨き粉を渡そうとしたのですが、おじいさんは大きい方がほしいと譲らず、最後には憤激されてしまいました。ルールに従って円滑に運営を進めることも大切ですが、時には臨機応変に対応することも大事なのだということ学びました。

具体的な伝え方ですが、「ボランティアの心得」のようなものを作成し、熊本大学のインターネット上で公開すると良いのではないかと思います。なじみがあり容易に行きつける熊大のホームページに掲載することで、いざボランティアをしようというときに何を参照すればいいのかわからなくて済み、自信を持ったボランティア活動ができると思われるからです。

# No.19

理学部 理学科 1年  
緒方裕也

活動日時 平成 28 年 4 月 17 日 ~ 平成 28 年 4 月 30 日  
(実働 182 時間・14 日)

活動場所 第二高等学校  
出水南中学校

## 活動内容

第二高等学校では、4月17日に避難所であるグラウンドの交通整備を行った。余震も多く続く中で、広い場所で車中泊を行いたいと考えている市民の方の対応を行い、周辺に住む老人などに水を届けたりした。

その後、17日夜～30日の間は熊本市立出水南中学校の避難所運営を行った。自分が担当していたのは避難者の方が寝泊まりされている体育館の運営であり、配給の準備から校舎への放送、物資の運搬や老人のお世話など、多岐にわたる内容だった。中でも自分達大学生数人のグループは避難所の学生ボランティアのリーダー的存在で、朝から夜まで毎日働いていた。朝は朝食の準備やラジオ体操、市役所の方の業務の引き継ぎなどから始まり掃除や近隣住民の方への対応や食器洗い、外部のボランティアの方々から届けていただいた物資があればそれを仮置き場となっている教室へ運んだりした。作業を行っていく中で他のボランティアの方々や中学校の先生方、避難者の方々など多くの方々とは仲良くなることができて、視野のとても広がる貴重な経験だった。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

災害支援活動をしていくうえで最も必要だと思ったことは、二つある。一つは自主性である。災害などの非常時には、受け身のまま待っていても誰も助けてくれない事態は進展しない。誰かがやるだろう、誰かに任せようと思っても駄目なのだとして強く実感した。自分達のような若く、力もある人間たちが周りの人達を一人でも多く助けていくことが大切であるのだと思った。

そしていざボランティア活動に参加するとなったら自分達に指示をいつも出してくれる人がいるわけではない。今まで学校などで指示を常に受けていた自分達にはとても大変なことである。私がやっていく中でも、お年寄りの体調が急に悪くなったりなど、急を要するような事態も発生したりした。そんな時に自分で行動を起こせる自主性、判断力、決断力やリーダーシップなどとても必要な力が多く感じられた。そして、ボランティアが終了したとき多くの力が少しでも以前よりは身についたと思った。二つ目は協調性である。非常時には人間の質といえるような、本性、真の姿が見えてくる。自分達がボランティア活動をしていく中でも、大学生と高校生だったり、大学生の違う部署の人同士だったりで衝突が起こってしまう事が何度かあった。その原因として、自分達のしている仕事ばかりに夢中になってしまい、相手が今何をしていて、どんなふうにしたいのかということを中心にきちんと理解できていなかったことが考えられる。非常時で正常な判断力を失っているからこそ、相手のことを一番に考えることが大事なのだと思う。人の助けをしようと思って行っているボランティア活動を通してほかの人達と喧嘩してしまっただけは何の意味もないと思う。常に人のことを一番に考え、協調性を維持続ける事がなによりも大事だと考える。以上の挙げた二つのことを大事にして、これから入学してくる後輩たちにはボランティア以外においても行動を心掛けてほしいと思う。そして、もしまた何かの非常時に遭遇してしまったとき、周りから尊敬されるような、素晴らしい働き、動きをして周りを助けてあげてほしい。

# No.20

理学部 理学科 2年  
上野雅仁

活動日時 平成 28 年 4 月 14 日 ~ 平成 28 年 5 月 30 日  
(実働 92 時間・31 日)

活動場所 熊本大学 武夫原グラウンド、体育館  
済々黌高校 体育館

## 活動内容

前震直後、自分自身も熊本大学武夫原グラウンドに避難したが、周辺地域の方も多く集まっており、また、気温も低かったため地面も冷たく、座ることもできない状況だったため、自身が所属している学生団体、紫熊祭実行委員会所有のブルーシートを運搬し、立っている人に渡し、座るように勧めた。

次の日の本震直後も同様の対応を取るも、避難者の数が前日より多く、グラウンドに入りきらない状態であったため、学生課との連携のもと、熊本大学体育館を開放、高齢者や子ども連れの方を優先して誘導を行った。ある程度誘導が済んだ後は、避難所の環境を整えた(受付の設置、マットの設置、人数の把握、支援物資の配布、その他避難所の体制確立など)。また、熊本大学周辺の避難所でのボランティアの人手が足りていないとの情報から、学生ボランティアで手分けして向かった。自分は済々黌高校へ赴き、夜間警備や清掃活動、配当などを行った。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

今回の経験で感じたことは2つあり、1つ目は、大学生は若く、パワーがあるということである。今回のような緊急事態が起きたとき、大人は仕事上の事務処理や家族の安否確認などですぐには行動ができないが、大学生は瞬発的に行動が可能であり、また、多くの友達同士で勇気付けあったり、食料をわけあったりできる。大人たちが環境を整えるまでの準備は十分に可能であると感じた。

2つ目は、友人の大切さである。ボランティアを率先して行ってはいたものの自分自身も被災者であるということをおぼろげに感じたり、無理をしすぎて体調を崩してしまったりする人を多く見た。そんなときに、支えてくれるのはやはり友人であったし、一緒にいることで確かな安心を感じることができていた。緊急時だからこそ意識できたことでもあるが、普段から一緒にいてくれるということに感謝できたら良いなと感じた。

これらの経験を後輩に伝える手段としては、自分が所属している学生団体、紫熊祭実行委員会での今回の地震の状況や体験、対応などを伝えるために、それらの情報をまとめた冊子を作製したため、それを一人でも多くの人に読んでもらったり、また、やはり直接会話して、自分が感じたことや行動したことをリアルに伝えていくのが一番良いと思う。また、それができるように、意識して行動していこうと思っている。

# No.21

理学部 理学科 2年  
川端大輝

活動日時 平成 28 年 4 月 18 日 ~ 平成 28 年 5 月 6 日  
(実働 100 時間・16 日)

活動場所 熊本大学  
城彩苑、花畑広場

## 活動内容

### 1. 熊本大学での避難所の運営

- ・グラウンドにブルーシートを敷く
- ・体育館内にマットやブルーシートを敷き、避難者を誘導
- ・物資の積み下ろし、配布
- ・避難所周辺の掃除と見回り
- ・所属する組織のスポーツ用具を貸し出し、避難している子どもたちと交流
- ・避難者への声掛け、話し相手
- ・けが人への簡単な手当

### 2. 城彩苑

- ・各地から運ばれてくる物資の積み下ろしと仕分け
- ・物資の積み込み
- ・城彩苑に入ってくるトラックや車の誘導

### 3. 花畑広場

- ・災害ボランティアセンターの運営の手伝い  
ボランティアの受け入れ、ニーズの調査、ピラ配り / ボランティアの説明・振り分け・派遣・活動報告

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えるとしたら、 どんな経験を、どのような方法で伝えるか

ボランティア活動を行う上で一番大切なことは被災者の気持ちをしっかり考えることである。これは自分が花畑広場で災害ボランティアセンターの運営に携わっていたときに強く思った。ここで自分がしていた役割が、ボランティアとして活動しに来た人を地震によって助けを必要とする人々のところに振り分けて、送り出すということだった。ボランティア活動後、参加者からの活動報告の中に、運営側は現場のことが分かっていないという意見が多くあった。そんな中、ある人から、被災者に一番大切なのは心のケアだということを知った。それから、ボランティア参加者を送り出すときに依頼書通りただ送り出すのではなく、依頼書から被災者のことを考え、こういうことにも困っているかもしれないとボランティア参加者と話して、送り出すことにした。すると、活動報告の際に被災者からの感謝の言葉が増えていっただけでなく、ボランティア参加者からもやってよかったという言葉も増えた。自分たちも被災者の1人であるからこそ被災者の気持ちはわかるはずである。ただボランティアに参加するのではなく、しっかり被災者の気持ちを考え、心のケアをしていくことが大切である。地震だけでなく、大雨による土砂災害や台風などによって、これからも被害に遭うことはあると思う。そんなとき、自分が率先してアクションを起こすことによってこれから熊本大学に入学してくる後輩に伝えたい。

# No.22

理学部 理学科 3年  
中野智広

活動日時 平成 28 年 4 月 14 日 ~ 平成 28 年 4 月 28 日  
(実働 51 時間・14 日)

活動場所 熊本大学 / 若葉小学校 / 御船町立小坂小学校 / 託麻原小学校

## 活動内容

4月14日、前震の後からは熊本大学のグラウンドで熊本大学体育会として活動を行った。紫熊祭などの学生団体と共にグラウンドにブルーシートを広げ、そこに学生達を座らせていった。直後の水道が出る時に、キーパーに水を溜めて後に飲料用として扱った。4月16日、本震の後暫くは動けなかったが、同じマンション、近くに住む友人を連れて託麻原小学校に向かった。その小学校で4時間程、椅子を出したり高齢者の介護をしたりと、手伝いをした。16日の昼からは学校の方へ移動し、学生団体としての活動が本格的に行われた。体育会としての仕事は物資の運搬や、清掃をメインの仕事として割り振られた。一時期何百人もの避難者の中に入れていたので、水周り、トイレは綺麗ではなかった。18日の12時まで、学生団体としての活動をした。その後、若葉小学校というところが人が足りてないという話を聞き、そこの手伝いに向かった。そこは、昼間は学校の先生や地域の方がボランティアをしてくれたが、夜になると皆帰り市役所の職員が1人だけという状況であった。高齢者の方が比較的多かったため、この状況はマズイと感じ、5~7日ほどそこに留まることにした。主にしたことは、夜間の体育館内での異常がないか注視することや、高齢者の介護補助、食事の配膳やトイレの掃除などをした。若葉小学校にいる途中にそこに来ている方から聞いた話で、小坂小学校も人が足りていないと聞いた。そこで、その日の夕方向かった。

そこでは、食料の配給を主として行っていた。避難者はあまりおらず、自分の家から、食料を取りに来る人が多かった。約2時間ほどの配給を終えたらまた若葉小学校に戻るという生活を1週間ほど送った。その後、若葉小学校の夜間も市役所の職員が、数人派遣されてきたので、私も実家に帰省することにした。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えるとしたら、 どんな経験を、どのような方法で伝えるか

私が、この災害支援活動での経験を、これからの熊本大学に入学する後輩に伝えることとして、高齢者介護である。地震が起きてから2週間、私は幾つかの小学校でボランティアをした。そこで考えたことは、若い大学生の手伝いが足りていなかったことである。現状私が行っていた若葉小学校では、夜間に若者の手が足りていなかった。これは、他の小学校、中学校の避難所でも起きていることであると思う。だが、夜間が本当に人手が必要なのである。高齢者が多い若葉小学校では、体育館の中を見渡すのが難しく、中々避難者の合図に気づくことができなかった。夜間の人手の大切さを知り、また補助の大変さも知った。高齢者の補助でした主な活動として、トイレ補助と食事の介護をした。本当に貴重な体験ができたと思う。普段の生活では、なかなか体験することができないことをした。この経験を経て、介護の大変さや、若者の大切さを改めて感じた。この高齢者介護は、実際に自分で体験することが、もっとも伝わるのではないと思う。話して伝えられるようなことではない。自分で経験することで、感じることもある。そこで、老人介護施設や老人ホームなどに遊びに行ったり、体験に行ったりすることが1番大事であると思う。

# No.23

理学部 理学科 4年

西本 徹

活動日時 平成 28 年 4 月 18 日 ~ 平成 28 年 5 月 8 日  
(実働 111.5 時間・18 日)

活動場所 熊本市在住の各高齢者宅  
阿蘇 YMCA ボランティアセンター 室園教会

## 活動内容

初めは近隣の教会に連絡を取って片づけと修理手伝いをし、そこから教会の伝手で重い家具などに困ってる高齢者のお宅に向かい何軒か片づけをしていました。同時に益城町の体育館の運営をしていたYMCAの上層部の方と知り合いだったので、手伝いたいと伝えたところ、阿蘇で社会福祉協議会と連携してYMCAの宿泊施設をボランティアセンター兼ボランティアの宿泊施設とする計画があってこれから益城町は報道に出ている分人が集まるので阿蘇の方で立ち上げの段階から手伝ってほしいと言われ、その設営と片づけを行いました。開設後は泊まり込みで、ボランティア保険の案内、保険料の管理、社協との連絡、ボランティアニーズ票の管理、ボランティア名簿の作成、宿泊予定者の管理などといった事務仕事から、避難物資の運搬、物資整理、瓦礫撤去、瓦礫の最終処理場への運搬などを行いました。その他にも施設の方で近隣住民にお風呂の開放をしていたので準備と掃除やタオルの洗濯と乾燥、またボランティアの健康が崩れるのが一番まずいのでトイレなどの宿舎の掃除もしていました。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えるとしたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

正直効果的と思われる方法はあまり思いつきません。誰かが語り手となってそれを皆が聞く機会をもうける事や、資料を目のつくところに展示する事ぐらいしか思いつきません。ですが伝えるべきであろうボランティアとしての経験はいくつかあります。まず一つ目が避難物資を送る際の注意です。「今後物資を送ることがある際には詳細なリストを同封すること。さらにベストなのは一つの段ボールに種類のものだけ詰めて段ボールに数と種類を大きく書くこと。」ということ伝えたいです。というのも物資整理をする際に送られてきた物資がなにかを確認する作業がとても大変で、送られてきた段ボールに何がどれだけ入っているか、同じブルーシートでサイズがそれぞれ違っていれば、どのサイズがどれだけ入っているか調べなければならぬのでかなりめんどくさかったのです。特に善意で個人の方が何でもかんでも詰めてきたときは大変で、その数が少なくなれば労力は必ず減るのでその分他の場所にさく人員も増えるし整理の速度が上がれば各避難所へのスムーズな配給へもつながると思います。二つ目が「瓦礫の片付け」という、一見力仕事で女性より男性の方がいいだろうと思ってしまふ作業における女手の重要性です。家だったものを片付けるということは当然その家の人の私物まで出てきます。あるお宅の瓦礫を片付けている際に、自分が片付けていた場所が偶々自分とそこまで年齢が変わらないような家の娘さんの部屋だったらしく、気づいたら近くにその娘さんが立って自分達の作業を微妙そうな顔でじっと見ていたことがありました。少し考えてから「男に自分の部屋を家捜しされている様なもん」だと気づき慌てて場所を変えると、予想どおりすぐに娘さんが自分の部屋周辺を母親と二人だけで片付け出しました。もしあの場所に女性がいれば、気づくのも早かったかもしれないし、女性がいればあの場所をご家族だけに任せずにすんだかもしれません。またあるご家族は家がつぶれ、畑や牛たちを放つとくわけにもいかず、ビニールハウスで生活しており、空気が最悪だったので、日常会話だけでもする余裕を与えたいと思ひ色々と話しかけたのですが全く会話が続かなかったのが、次の日に女性を一人メンバーに加えると、やはり女性がその場にいないかいないかは大きな差なのか、ご主人の弟さんに話しかけられていました。女性の中には「何かしたいけど自分には無理だ」と思う方もいると思うのでこのことを伝えられればなと思います。

# No.24

医学部 医学科 1年

持田香織

活動日時 平成 28 年 4 月 18 日 ~ 平成 28 年 5 月 8 日  
(実働 52 時間・14 日)

活動場所 秋津公民館 / 広安西小学校 / 秋津小学校 / 黒髪小学校  
/ 託麻原小学校 / 熊本大学 / 慶徳小学校 / 池田小学校 /  
ひろやす荘 / 熊本大学医学部附属病院

## 活動内容

地震後直後に、慶徳小学校で炊き出しを行う団体のお手伝いをした。秋津公民館・広安西小学校・秋津小学校・黒髪小学校・託麻原小学校・熊本大学・池田小学校での活動について述べる。母が野菜ソムリエとして活動しており、避難所での食事は野菜が不足しているだろうから、生の野菜や果物を使ったスムージーを作って提供するという活動を上記の場所で行っていたので、その手伝いを行った。ひろやす荘は指定の避難所ではなかったので、支援物資など、特に食事が不足していた。全国からシェフが益城にキッチンカーで来て、炊き出しを行っており、その一部をひろやす荘に届けて、配膳をするという活動を行った。熊本大学医学部附属病院では、病院で働く職員の方々の子供を預かる学童保育の学生ボランティアに参加した。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えるとしたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

今回の熊本地震を通じて一番初めに感じたことは、熊本では大きな地震が起こることはないだろうという油断が対策不足を生み出していたことが少なからずあったということである。だからまずは災害に対する備えの方法などを載せたガイドブックのようなものがあれば、個人としても団体としても対策が行いやすいのではないかと考える。自然災害を経験した被災者として感じたこと、怖さや過去の自分に対する反省点など数多くのことがあるが、大学というのは入学してくる人たちが地元の人だけでなく県外の人も数多くいるので、地震の体験というものをありのままに伝えていくことは被災地で暮らす私たちのやるべきことだと考える。その方法としてはワークショップやディスカッションのような場を設けることが直接話ができるという意味で最も良いと思う。しかし、地震を体験した学生が在学している期間は限られているので、映像などで記録を残しておく、もっと下の世代が入学してきた時にも役立てることができると思う。私自身、今回の活動報告会に参加して、今まで知らなかった熊本大学にあるボランティア団体の存在や活動内容を知ることができたり、他の人がどのようなボランティア活動を行っていたのかまたはこれから行うのかが知れたり、とても有意義な時間を過ごすことができた。そのため、これからもこのような活動報告会のような意見交換ができる会が定期的に開かれていき、それが下の世代へと続いていくと、今後同じような災害がもしまた起きた時に今回よりももっと行動できる範囲が増えたり、人が増えたりするのではないと思う。

# No.25

医学部 保健学科 1年  
壇 千智

活動日時 平成 28 年 4 月 18 日 ~ 平成 28 年 5 月 2 日  
(実働 145 時間・15 日)

活動場所 済々黌高校体育館

## 活動内容

私は本震の二日後から家の近くであり母校である済々黌高校の体育館にてボランティア活動を行った。具体的な活動内容は、物資の搬入や配給、トイレの水管理、清掃などでその他にも状況に応じてその都度自分たちで考えながら可能な範囲での支援を行った。最も大変だったのは水回りの管理で、地震後かなりの長い間断水していたためプールの貯水を活用していたがその運搬に苦労した。物資に関しては SNS などでの呼びかけもあり各地からたくさんの様々な支援物資を届けて頂き時には遠くの県外からも炊き出しに来て下さったおかげで避難している方々すべてに物資を行き渡らせることができたように思う。私が活動していた避難所は公式の避難所ではなかったため集まった学生ボランティアだけで支援を行っていた。そのため食中毒などの問題が起きないように食品の衛生管理には特に気を付けたので特に大きな問題は起きなかったが、もし問題が起きたとしたら誰が責任を持つのかということは非常に難しい課題であると感じた。私自身もその避難所で寝泊まりながら活動していたため、避難者の方々の不安や不満などは十分に理解できた。よって、できるだけ明るく前向きな気持ちになってもらえるよう積極的にコミュニケーションをとり、子供たちと遊んだりすることにも力を入れた。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えといたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

今回実際に自分がボランティア活動を行って得たものは、自分が苦しい状況であったとしてもどこまで他者に尽くすことができるかということと災害の脅威に対する再認識だ。支援活動を行う者は、まず自分自身の生活を自力で確立できることが前提条件であり、真摯かつ謙虚な態度で臨まなければならない。仲間づくりや就活のネタづくりなどの不純な動機で活動するモンスターボランティアが問題となっていたが、そういったボランティアとしての在り方というものを原点に立ち返って初めて考えることができたのは非常にいい経験となった。また、災害の現場ではどれだけ知識を持っているかということが時には命をも左右するということを身をもって知った。災害の起こる前からもっと防災に対する意識を高めることはもちろん、もし災害が起きたらどう行動するのかを日頃から家族や友人と話し合っておくことも大事なことだと感じた。これらの経験を後輩に伝える手段としてはいろいろな方法があると思うが、やはり経験者から直接話を聞くことのできる機会をきちんと設けることが一番だと私は考える。多少無理矢理であったとしても、例えば学校などで講演会や交流会を行えばたくさんの方が参加できいろいろな話を聞くことができるので様々な視点から災害支援活動について思考することができると思う。

# No.26

医学部 保健学科 1年  
有働由梨

活動日時 平成 28 年 4 月 23 日 ~ 平成 28 年 5 月 8 日  
(実働 144 時間・16 日)

活動場所 熊本災害ボランティアセンター マッチング班

## 活動内容

熊本市災害ボランティアセンターは、受付、マッチング、誘導、物品、電話応対という部署に分かれていた。私はマッチング班だった。マッチング班の仕事の内容は、午前中は、まず、ボランティアに来た人をニーズの人数に合わせてピックアップし、指定されたテントまでボランティアの方を誘導する。次に、テントまで来たボランティアの方に電話番号、リーダー、副リーダー決め、ニーズの内容、活動する際の注意事項、現地までの行き方、持って行ってもらう器具の説明をする。そして誘導の方に引き継ぎをし、電話番号や、その他その班の個人情報が入ったファイルを本部に持って行くという仕事をしていました。午後は、現地から帰ってくる人の活動報告を受ける人と、本部に残り、どの班が戻ってきたのか、また、今日行ったところは明日以降もボランティアが必要なのか、出したボランティアの人数と帰ってきたボランティアの人数の確認にわかれ活動していた。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えといたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

私は、今回のような活動報告会を教養の授業に入れる、また、実際にボランティアした後に災害ボランティアの時はどうしたのかという報告会をするなど今回の地震の経験を伝える授業を取り入れたいと思う。授業に取り入れることで、ただ講演会を開くよりも単位も取れ、自分の意思で選択したので、よりボランティア活動について興味を持ってくれるのではないかと思う。そして、実際にボランティアをすることで、ただ話を聞くよりもボランティアについて深く考えることができると思う。後輩に伝える手段としては、口頭で伝えるだけではなく、それぞれのボランティアの報告書を残しておくことも大切だと思う。将来起こってほしくはないが、熊本、または熊本に近い県で地震が発生した時に、私たちが実際に行ったボランティアの内容を詳細に書き残しておくことで、今回地震よりもスムーズにボランティアができると思う。私がいた熊本市災害ボランティアセンターは、一から自分たちで立ち上げたので、初めの頃は、ボランティアに来てくれたのに災害ボランティアセンターが混乱していたため、せっかくなら来てもらったボランティアを何百人も何もさせないまま返す日が続いていた。なので、次に起きた地震のときにまた一からボランティアをたちあげなくて済むよう、報告書を残すべきだと思う。どんな内容を伝えるかについては、自分の地震後の行動、自分の行ったボランティア活動、なぜボランティアをしようと思ったのか、どんな手段でボランティアを知ったのか等の経験を伝えるといいと思う。特に、私は、「なぜボランティアをしようと思ったのか、どんな手段でボランティアを知ったのか」については詳しく言うべきだと思う。なぜなら、私も実際にそうであったがボランティアをしたくてもどこにいったいいかわからない。」また、「自分なんかボランティアに行つて何の役に立つのだろうか。」などと思い一歩が踏み出せない人が多いと思うからだ。私は以上のことをすることで、後輩に災害ボランティアを伝えていくといいと思う。

# No.27

医学部 保健学科 1年  
有村優花

活動日時 平成 28 年 4 月 19 日 ~ 平成 28 年 12 月 31 日  
(実働 96 時間)

活動場所 益城町 / 福岡県宗像市 / 福津市 / 福岡市の駅 / 自宅

## 活動内容

益城町での聞き取り調査を行った。(8 時間× 2 日間) 初めて、益城町を訪れて震災の被害の大きさに驚いた。二日目は仮設団地でお話を伺ったが二日間とも今後に対する不安や心配を感じた。これらの不安を少しでも解消していけたらいいなと思った。

また地元、福岡県での募金活動も行った。(5 時間× 3 日間、6 時間× 1 日間) 熊本出身の方や熊本の大学を出た方などから声をかけていただいた。人の暖かさを感じるとともに、これから復興に向けて自分ができることを続けていこうと思った。益城までのクリスマスケーキの配布も行った。(3 時間) 仮設団地にいらっしゃる方に配り嬉しそうな顔を見ることができた。今、行っているのは被災した子供たちに向けた学習支援を行うための準備である。(1 時間× 10 日間、1.5 時間× 3 日、2 時間× 5 日間、3 時間× 4 日間) 栃木にある NPO 法人と協力をしながら、学習支援を行うための準備をしている。また、PTSD に対しての勉強会 (2.5 時間× 7 日) も行った。そして、学んだことを実践したり (2 時間× 3 日) とこれからの 3 月までの活動に生かしていけるよう準備が万端にできた。また、この活動は平成 29 年 3 月まで継続していく予定である。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えといたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

私はボランティア活動を通じて経験したことを伝えるためには、SNS での発信や授業のなかで活動の報告を行う機会を作るなどしたらよいと思う。自分自身、熊本地震学生ボランティア報告会に参加をして、他の方がどのような思いでどんなことをやったのかを知れてとても有意義な時間になったのではないかと考えている。このようなことをベシックや肥後熊本学といったような授業内でも行っていけたらいいのではないかと考えた。また、私は今子供たちへの学習支援を行うというボランティア活動を実施していくための準備をしている。今まで、様々なボランティア活動を行ってきたのであれば自分にもできると感じ、このボランティア活動に参加しようと思った。初めての試みであり、うまくいかないことの連続であるが三月末までこのボランティア活動がうまくいき、子供たちや保護者の方に満足していただけるように頑張っていこうと思っている。このボランティア活動は熊本大学代表として行っており、本部のある宇都宮大学の方と打ち合わせをしたり、一緒に活動を行ってくれるメンバーを募集するためチラシ配りなど周知活動をしたりとたくさんの経験をさせてもらった。これからボランティア活動が続けていく中で経験することは、もっとたくさんあると思うから、それも含めて後輩たちに残せたら嬉しいなと思う。また、図書館で地震に関する本や写真などを交えての展示をしているが、そこに私たちが行ったボランティア活動や経験して感じたことをまとめた展示物とかあっても後輩や図書館に訪れる人に伝えることができるのではないかと考えた。それらの展示物を見て、熊本地震の被害の大きさを感じてもらおうとともに自分たちもこのようなボランティア活動を行ってみたいと思ってもらえたらいいと考えた。

# No.28

医学部 保健学科 1年  
上野佐和子

活動日時 平成 28 年 4 月 21 日 ~ 平成 28 年 5 月 7 日  
(実働 140 時間・15 日)

活動場所 済々黌高校

## 活動内容

避難所となっていた済々黌高校でのボランティア活動は主に、支援物資の配給や断水時のトイレの水の確保、水場周りの衛生管理だった。支援物資は県内外の個人や団体から定期的に届けられるため、不足することはなかったが、避難者に平等に振り分け、日々入れ替わる物資の在庫管理は大変だったため、管理の方法を確立するために試行錯誤を重ねた。断水は 1 週間ほど続き、水が出初めてから水量が安定しなかったため、その間の管理が大変だった。特に手洗いやうがいを使用するための水が出ないことが一番問題で、そのような状況の中でも除菌などをしながら、清潔を保てるようにした。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えといたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

私は、上記で述べたように、避難所の運営を主な活動内容としてボランティアを行ったが、先日の活動報告会で、避難所での活動だけでなく、実際に益城や南阿蘇の被害が甚大だった地域でがれきの撤去などの活動や、ボランティアセンターなどで集まった人々をさばく側の活動をした人など、多方面での様々な活動について知ることができたと、それぞれでその経験から学んだことも聞くことができた。自分自身がボランティア活動を通して学んだことはもちろんだが、この報告会で自分とは違った経験をした学生の皆さんのお話がきけたことも、ボランティア活動を通しての学びだとおもう。だから私は、この度の熊本地震で新たに発足したボランティア団体や、熊本大学にもともとあったボランティア団体などと協力して、定期的に活動報告会を行ったり、震災の中で学生がそれぞれ経験した貴重な体験を月日と共に風化させないようにするために、広報誌を発行したり、社会連携科目などのように教養教育の中に取り入れて、これから熊本大学に入学する後輩達はもちろんのこと、在学中の熊本大学生にも知ってもらって経験を共有出来たらいいのではないかと考える。また全学で震災の体験談やボランティアの経験から学んだことについて、ラフな雰囲気でも話し合ったり、質問したりできるような交流会等の場を設けて、伝えていけるとより豊かな学びになると思う。自分自身も先日の報告会で、さまざまなことを学び自分の経験がよりふくよかなものになったと強く感じたし、このような機会がもっと増えるといいなと思った。

# No.29

医学部 医学科 1年

永野遥希

活動日時 平成 28 年 4 月 17 日 ~ 平成 28 年 5 月 7 日  
(実働 92 時間・22 日)

活動場所 みるく病児保育センター

## 活動内容

みるく病児保育センターでの、「みるく寺子屋」に参加した。

この活動の趣旨は、通常は病気によって保育園、幼稚園、小学校にいけないが仕事などの理由で家に看病してくれる人がいない子供を日中預かる「病児保育」という特殊な保育に取り組んでいる団体が、地域の子育ての受け皿として、また、緊急時の子どもたちの居場所づくりと、家族以外に居場所になる人の必要性を感じて、PTSD になる前に安心安堵の蓄積を、感情出せる場の提供をするための活動で、小学校、保育園が休校・休園になるなか、震災後に仕事に出なければならない方たちのお子さん、を、日中預かるという社会奉仕活動であった。私たち学生ボランティアは、本震の翌日から、地震で被害を受けた保育室を、子どもたちを預かることのできる状態に復旧させる為の後片付けから支援へのかかわりを開始し、「みるく寺子屋」の支援活動が終わった 5 月 7 日までの、22 日間、学生ボランティアとして、子どもたちの遊び相手、食事の介助、勉強の面倒を見る、保育室の環境整備などに携わった。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えといたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

今回のボランティア活動を通して、実際に被災した子どもたちと向き合ってみて、子どもたちが多くの不安を抱えているということが切実に伝わってきた。また、このような大災害の中でも「こんな時だからこそ、仕事にいかなければならない」方たちの多さにも、驚いた。このような方たちの気持ちは、テレビから映し出される被災者の声とは、質を違えるものであるとも感じた。そして何より、公的子育て支援サービスがストップしている中で、私の参加した「みるく寺子屋」の取り組みは、参加した当初は日々、目の前にある被災者のニーズを淡々と満たして行っているだけのように感じていたが、5 日ほどたったころから、預かっている子どもと、スタッフの方たちのかかわりをじっくり見る余裕ができてくると、1 対 1 でゆっくりと話すことのできる時間を一人一人にとっていたり、子どもたちに、大声を出して笑う時間を提供していたりと、メリハリをつけた一日の過ごし方をさせていらっしやるのがわかるようになってきた。そして、施設長の方が「震災の時の心得は、自助・共助・公助であるから、今は、みなさんの力をかりて、必死で共助しているところです。ありがとうございます。皆さんのおかげです。」と言われた言葉に感動を覚えた。いろいろな大学の大学生 10 名ほどが、ボランティアに参加していたが、参加した理由を聞くと、「初めは、ラインやフェイスブックなどで活動を見て、楽しそうだと思って参加したが、今は、使命感が生まれてきた」と口をそろえて話していたのも印象的だった。SNS で、すぐに情報を拡散できる現代で、それが問題になるときもあるが、このうな「共助」が必要なときには、とても有効な手段であると感じた。また、ボランティアや社会奉仕というものが、私たちの若者にとって、照れくさい、ダサイイメージを持たれがちだが、自分たちが必要とされているという使命感が生まれれば、長い支援活動にもかかわれると感じた。今後、このような震災は起きないことを願いたい。もし、また、どこかで自分に使命感が生まれるような支援活動をすることがあったら、今一度、初めからじっくり取り組んでみたいと思うし、SNS などを駆使して、周りのみんなに「共助」を広く呼びかけたいと思う。

# No.30

医学部 保健学科 2年

大淵彌潮

活動日時 平成 28 年 4 月 19 日 ~ 平成 28 年 4 月 28 日  
(実働 50 時間・8 日)

活動場所 竜南中学校 / 本荘小学校 / 城東小学校 / 春竹小学校 / 必由館高校 / 済々黌高校 / 熊本中央病院

## 活動内容

避難所として人が集まった学校へ行き、どのような運営状態なのか、人手や物資は足りているのかななどの情報を集め、所属していたボランティア団体である“働き部隊”の本部に連絡したり、避難所を運営している方々の指示を受けて荷物を運んだりマットを敷いたり水を運んだり炊き出しをしたりといった手伝いをした。

夜間ボランティアにも行き、夜中に避難所の見回りやトイレ掃除、高齢者のトイレ介助をした。

竜南中学校では避難所運営の中心的役割を担う一人として、炊き出し、食料の配付、ごみの処理や掃除などの衛生管理、水やスポーツ飲料を配ってエコノミークラス症候群予防のための声かけ、避難された方の傾聴などを行った。中央病院と本荘小学校でのボランティアは、所属する医学部アンサンブル部の依頼演奏として、入院している子供や病院で働いている職員の方の子供、避難してきた小中学生のために開いたコンサートに出演した。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えといたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

まず私が一番に伝えたいのは、自然災害はいつ起こるのか分からず、その地域の人すべてが被災するため、皆が同じようにショックを受け、普段の生活とはまったく違う社会状況、精神状態の中で暮らすことになる、ということだ。そのためボランティアすることが偉く、しないのは人として良くないということにはならない。「ボランティアできる人が、できる場所で、できることを、できるだけやる」という基本をぜひ伝えたいと思う。

また、やりたいことや支援したいことが自分の中にあっても、その時の状況によっては支援できずに自分の無力さを痛感したり、逆に、人と触れ合うことで元気づけるつもりが、こちらが励まされたりするといったことも伝えたい。私の場合、看護学生として避難者の健康状態が著しく損なわれないように、清拭の手伝いや健康相談などをするべきではないのだろうかと思いつつ、どのように提供したらいいのか、じっくり考える余裕も相談できる人もいなかったため、結局何もできず、非常に不甲斐なさを感じた。しかし、避難者の方の暇つぶしにでもなればと思ってお話を聞いてみた際には、ボランティア活動に感謝の言葉をもらったり、楽しい話をしてくれたりと私自身元気づけられることもあった。

これらの経験は、今回行われたボランティア報告会のようなワークショップで伝えるのもよい方法であると思うが、より多くの人に知ってもらうために、自分たちの経験をそれぞれが文章にまとめ、文集のような本として残すこともよいのではないかと思う。また、私たちの経験だけでなく、地震が起きたときや避難所の実際の状況が現実感のあるものとして伝わるように地震資料館を建てて等身大の写真を展示したり、ぐちゃぐちゃになった家の中を再現した展示物を作ったりすればよい媒体となるのではないかと考える。時間がたてば経験した私たちも記憶が薄れ、忘れていってしまうので、視覚に訴え、かつ物体として残る方法で伝えることが必要である。

# No.31

薬学部 薬学科 1年  
野口勇夢

活動日時 平成 28 年 4 月 19 日 ~ 平成 28 年 5 月 8 日  
(実働50時間・10日)

活動場所 西原村体育館 / 河原小学校 / 西原村の様々な住宅

## 活動内容

私は4月14日の前震、4月16日の本震の両方を現在も住んでいる西原村の実家で体験しました。

本震が起きてから約二日は自分の住んでいる地区の道路や家屋を埋め尽くしがれきの撤去、水道管の工事、食料の調達などを行っていたためボランティアはできていませんでした。ボランティアにとりかかりはじめたのは、本震から3日後からです。初めてのボランティアは日本各地から運ばれてくる支援物資を村の体育館に搬入し、整理することでした。その日は大雨が降っていて、村全体に避難指示が出ていました。午前中は車の中でじっとしていましたが、午後になって役場に勤めている知り合いからボランティアの打診があったので、行ってみました。そこにはほとんど休みなく足を動かし、外部の人や、高齢者の方々などの対応に追われている役場職員の方々の姿がありました。当時の睡眠時間は多い人でも3~4時間と聞き、自分も村のため、復興のために何か力になりたいと思い、ボランティアに積極的に参加するきっかけになりました。私はその後、近隣住民の家屋のがれきの撤去をしたり、避難所に避難している子供たちと一緒に遊んだりしました。4月の下旬は実家が農家をしていてサツマイモを植えたり倉庫を整理したりして、震災で遅れた分の作業をしていたためボランティアは一時休止していたのですが、ゴールデンウィークあたりから村のボランティアセンターに行き、そこで外部の人々と協力して活動しました。そのときは、主にかれきの撤去や、避難所となっていた体育館での各家族ごとの仕切りづくりなどです。やり方が分からず、大変な部分も多くありましたが、外部からのボランティアの方々や、避難所の村民の方々に元気をもらいながら楽しんでボランティアをすることができました。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えたとしたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

私が後輩に支援活動の経験を伝えたとしたら、真っ先にボランティアの楽しさを伝えたいです。確かに、ボランティアをするにあたって、被災者の気持ちを考えたり、初めての環境で活動をしたり、活動をするときに自分の安全を確保したりと、難しい部分も多くあります。しかし、外部からの人々と一緒になってボランティアをするときは自分では考えなかったようなアイデアが聞けたり、そこで新たなつながりが生まれたりします。避難所で活動するときは、村の人々から逆にこちらが元気をもらえます。そして何ととっても、ボランティアを通して、村の家屋が片付いていき、村民の笑顔が増える時の感動は、ボランティアをした人でしか味わえない大きなものがあります。このボランティアを通して得た経験は、将来必ず自分のためになると思います。そのようなボランティアをする意味を後輩に伝えていきたいです。その方法ですが、私は二つの方法で伝えるべきだと思います。一つ目は、今回の活動報告会のような会を定期的で開催していくことです。私は活動報告会で初めて熊本大学にボランティアサークルがあるということを知り、入部しようと思いました。このような会では、実際にボランティアを様々な場でしている多くの人々と顔を合わせることがができます。そしてその人々から体験談を聞くことによって、自分に最も合った形でボランティアに参加することができるきっかけになると思います。

しかし、そのような会はいつでも開催できるわけでもなく、また、誰もが参加できるとも限りません。そこで、二つ目の案として、ボランティア活動をしている人々の行っている活動をまとめた広用紙などを展示する写真館のようなものを作ることだと考えます。これにより、ボランティアが学生にとって身近な存在となり、多くの後輩に広まっていくはずでです。また、熊本大学外の人々にも足を運んでもらえたら大学と地域のつながりももっと深いものになっていくはずでです。以上のような情報の発信を通して、熊本大学で延々と活動が続いていけたらいいと思います。

# No.32

薬学部 薬学科 1年  
木原拓也

活動日時 発災 ~ 4月終わり

活動場所

## 活動内容

1部：初期（発災～4月終わり）

ほくは、前震を熊本大学で、本震を家でうけた。それまでは、震度1~2しか経験したことはなかったし、東北の震災もどこか遠い異世界で起こったことのように感じていた。それが短い期間で二度も震度7がおこった。突然、TVのなかのことが目の前に迫ってきた気がした。それからは友達が県外の実家に帰っていくのを見ながら毎日、睡眠時間を削って避難所である「済々黌」と「城東小学校」を主に運営していた。城東小学校では避難者の方が寝る段ボールベッドの製作指揮なども行った。

2部：中期（4月終わり～5月はじめ）

このころ、熊本市内の避難所は閉鎖したり、ある程度落ち着いてきていたのでほくは日中は熊本市のボランティアセンターの運営をシタ方から避難所の運営をし、自分は薬学部の避難所に寝に帰るという生活を送っていた。そこでほくはある人に出会った。その人との出会いが僕の長期的な活動への大きな支えとなった。

3部：長期そしてこれから（5月はじめ～現在）

熊本市のボランティアセンターで出会ったある人は僕を「熊助組」へと誘ってくれた。また、それとは別に個人的に益城の避難所「はびねす」へのボランティアも誘ってくれた。ほくはその人と出会えたおかげで一人ではとてもできない活動を様々行えた。そして現在も「熊助組」として定期的に活動を行っている。

まとめ

ほくは「つながり」というものの大切さをとても感じた。つながっていれば、悲しみや苦しみをほんの少しだけでも共に背負えるし、情報のネットワークも広がることで活動の幅も広がると考えているからだ。それを今回の地震でとても感じた。改めて、文章に起こせば書きたくないこともたくさんあった。でも、ほくは熊本市のボランティアセンターでのある人との「つながり」がなければ3か月も益城の避難所に週5で通い続け寝泊まりしながら傾聴ボランティアを行っていくのは不可能であった。この出会いにはとても感謝したい。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えたとしたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

では、この貴重な体験・経験をどう伝えるだが、話をし、写真を見せることで伝わるかと考えればこれはほとんど意味を成さないであろう。実際に熊本市で地震にあった何人かの友達に同じことを試したが益城の現状は、過酷さは本当の意味では何も伝わらなかった。では、どうすればいいか。実際に自分の目で見て、聞いて、感じるしかないのではないと思う。ほく自身、益城や阿蘇、西原村にはいくたびに地震の被害の大きさを過少して見ていた面があったし、話をいくら聞いてもピンと来ていなかった友達も実際の空気に触れて「初めて言っていた意味がわかった」と言っていた。なので、ほくはもし後輩に伝えたとしたら「熊本市内と益城、阿蘇、西原などの特に被害が大きかった地域の地震被害の差に、それぞれの地域に住んでいる人たちの今回の地震に対する認識の温度差について後輩たちに実際に現地に行って自分で実感してもらう」という形で伝えられたらいいのではないかと思っている。

# No.33

工学部  
マテリアル工学科 1年  
前田信行

活動日時 平成 28 年 4 月 19 日 ~ 平成 28 年 5 月 3 日  
(実働 48 時間・2 日)

活動場所 花園小学校 / 城山小学校 / 熊本西高等学校

## 活動内容

地震のあった後私の家の近所では断水が起こったため水不足が発生しました。そのため私は近くの花園小学校へ給水に行きましたが、私の家の近所にはお年寄りの方が多く、給水のため長時間外に並び続けることが難しい方が多かったので自宅と小学校を往復し、近所の方に水を配りました。その後友人から小学校のボランティアを手伝ってほしいと頼まれたため、城山小学校へと向かいました。城山小学校では、受付で避難されてくる方に名簿に名前を書いてもらったり、食事の配給の手伝いをしました。夜には貸し出し用のタオルケットの整理をし周辺で不審者の目撃情報が寄せられていたため、受付には常に人が待機し、1時間ごとに小学校の中の見回りをしました。朝になると配給の手伝いをし、そのあと支援物資の整理をしました。支援物資の中には賞味期限の近い菓子パンのようなものがたくさんあったため、賞味期限ごとに整理をして、賞味期限の近いものから昼の配給で配布しました。その後城山小学校でのボランティアは解散しましたが、一部の人たちと近くの西高校へ行きました。そこで炊き出し用の味噌汁を作り、夜ご飯の際に配布しました。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えといたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

今回の災害支援活動で後輩に伝えたいことは主に 2 つあります。

1 つ目は災害に備えることの大切さです。地震で断水になり給水場では 8 時間待ちのような状態になっており、待っている間にその日の給水は終了するといったこともありました。小学校のグラウンドのようなところで何時間も待ち続けるのはとても大変ですし、上記のような理由で並べば必ずもらえるというわけでもありません。今では保存できる期間の長い水もたくさん売られているので、少し多いんじゃないかと感じるくらい保存していてもいいのではないかと思います。

2 つ目はボランティアとして行動する時の心構えです。今回のボランティア中にボランティアの中の数人がツイッターを使って支援物資を求めました。するととても多くの方が支援物資を持ってきてくださったのですが、その量が多くなりすぎたため、その場での整理が難しくせつかく支援に来てくださったのに最終的には物資の援助をボランティアでくださった方を追い返すような形になってしまいました。そして一連のボランティアの中で一番印象に残っているのが市の役員の方に言われた「避難所を快適にしすぎてはいけない。」という言葉です。言われた直後はそれがとても酷いことのように感じましたが、その後と言われた説明で納得しました。避難所が快適になりすぎると避難をする必要のない人まで避難所にきたり、逆にもともと避難をしていた人が帰れるのに帰らなかつたりするため、本当に避難しなければならない人のスペースを圧迫してしまったり、復興が遅れてしまう要因にするからです。ボランティアとしては良かれと思ってやっていた行為が結果的に本当に大変な人によりつらい環境を強いたり、復興が遅れさせる原因になってしまっていました。もし本当にボランティアをしたいのであればそこの責任者のような人の指示をしっかりと聞き、自己中なボランティアにならないように気を付けないといけないと思いました。このような経験は今回のような発表会のような場を定期的に設け、多くの人にこのような経験を聞く機会を提供することが重要だと思います。実際私自身も今回の報告会に参加し当時の忘れかけていたことをたくさん思い出すことができました。また、図書館のような人通りの多いところに当時の写真や経験談を展示することも効果的なのではないかと思います。

# No.34

工学部 建築学科 1年  
北山光洋

活動日時 平成 28 年 4 月 17 日 ~ 平成 28 年 5 月 8 日  
(実働 110 時間・22 日)

活動場所 済々黷高校 / 武蔵塚武道場 / 熊本市男女共同参画センターはあもにい / 池田小学校 / 熊本大学南キャンパス工学部 2 号館 / 熊本大学大江総合運動場

## 活動内容

済々黷高校での主な活動内容としては、断水だったためトイレの水の給水作業、送られてくる物資の搬入、避難者の方々への配給、配給のための昼食や夕食の調理、トイレや避難者の方々がいるところなどの清掃作業、夜間の見回り、避難者の方々の人数のカウントなど避難所の運営全般を行っていた。その他にも、避難者の方々へのコミュニケーションとして会話などをする時間もとっていた。

その他の、場所では建築学科の田中先生の指揮のもと、紙のパイプと布で避難所に間仕切りを作る活動をしていた。仕切りを設営したところは熊本市男女共同参画センターはあもにい、池田小学校、武蔵塚武道場の 3 か所で、熊本大学南キャンパス工学部 2 号館と熊本大学大江総合運動場では布の切断や、紙のパイプに穴をあける作業などの準備を行った。具体的な設営作業は、紙のパイプで柱と梁を組み立て、そこに布をかけ安全ピンでとめるという作業で、1 か所あたり約 100 部屋設営した。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えといたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

まず、済々黷高校での活動を通して感じたことは、人と人との会話やコミュニケーションの大切さです。活動は主に給水作業や物資の運搬や搬入などの、力仕事が多いのですが、それよりも避難者の方々への気遣いや会話などの方が難しいと感じました。自分自身や一緒にボランティアをしている人も含めて、避難者の方々は大きな揺れを経験しているし、強い余震が続いていたので、とても不安な気持ちを抱えていました。そのような状況だったので、一人の方が少し体調を崩したただけで、「インフルエンザだ。」や「ノロウイルスだ。」などと言う人がいたり、トイレが少し汚れているだけで怒ったりする人などがいました。ですが、そのような方々も声をかけたり、挨拶をしたりすると落ち着いて話をしたりしてくれました。やはり、地震などのみんなが不安になっているときこそ、会話や人と顔を合わせる事が大切になってくるのだと思いました。

また、建築学科の間仕切りプロジェクトでは、自分の知識をどう物事に生かすかということの大切さを実感しました。紙のパイプと布という非常に軽い材料を使うことによって、準備や片付けがスムーズにいき、短時間で多くの部屋を設営することができました。また、もし大きな余震がきて設営したパイプが倒れても、軽い素材なので避難者の方々が大きなけがをしない、ということを建築学科の先輩に聞きました。今までの大学生活で培ってきた建築の知識を生かして避難者の方がよりよい環境で過ごせるようにする、ということにとっても感動したし、自分自身もこれからの勉強を十分に、将来人のために生かそうと思いました。

これらの二つのボランティア活動や地震での経験を通して、共通して思ったことは人と人とのつながりの大切さです。地震での大きな揺れを一人で経験すると、しばらくの間一人で寝るのがとても怖くなります。そんなときに、避難所でのボランティアの仲間や、建築学科の友達と顔を合わせて話をするだけで安心します。また、ボランティアの活動を通して新しい友達ができたりと、つながりが増えました。地震はとても怖くて、本当に命の危機を感じました。しかしその反面、ボランティアの仲間ができたり、建築学科の友達との絆が深まったりと良いこともありました。積極的にボランティアに参加して本当に良かったと思います。これらの経験などは、ボランティアをした方が講演会や、報告会を行ったり、大学でこれらの経験を書いたパンフレットなどを作って配布したりする、というように広めていくべきだと思います。後輩だけでなく、全国に今の熊本の状況などを伝えて、熊本に来てもらうというのも良い方法だと思います。また、熊本も完全に復興したわけではありません。地震が起きて半年以上が経ちますが、この地震やボランティアでの経験を忘れてはいけません。この経験を後輩や全国の人に伝え、そして、自分たちが社会の一員として役立てるように生かしていきたいです。

# No.35

工学部 社会環境工学科 1年  
今村友香

活動日時	平成 28 年 4 月 20 日 ~ 平成 28 年 5 月 8 日 (実働 126 時間・14 日)
活動場所	熊本市北区役所 / 熊本市社会福祉協議会 ボランティアセンター

## 活動内容

【熊本市北区役所】物資の運搬：県外からの物資や北区に振り分けられた物資を倉庫に詰めた。また、北区に物資を取りに来た人へ配布することもあった。

【熊本市社会福祉協議会ボランティアセンター】運営の手伝い、ブロック塀の撤去：今回は、市社協のみなさんと運営側として活動した。主に受付を担当し、県内や県外、外国からボランティアに来た人を受け付けた。災害ボランティアの保険に加入してもらうように説明したり、ネームプレートの配布などを行った。また、ボランティアに行った人の活動報告を聞き、これからのボランティア運営をどうしていくべきか考えた。ブロック塀の撤去では、ボランティアのニーズがあった東区の家に行き、5,6人でブロック塀の撤去を行った。ブロック塀は大きな塊になって倒れていた。男性でも一人じゃ運ぶことの難しいものや、全員で一緒に持ち上げて運んだブロックもあった。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えたとしたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

今回ボランティアを行って、震災直後のまだ混乱している中でボランティアを運営していく難しさを知った。震災で多くのライフラインが閉ざされて物資が届かなかったり、避難所に人が集まり、職員の人に対応に追われていて、復興に向けたボランティアを運営することは困難であるようだった。私は友達が、熊大の先輩がボランティアを募集していることに気づき誘ってくれたので、ボランティア活動をすることができたが、その誘いがなければ活動を知ることなかったであろうから、震災が起こってすぐ、学生が率先して動くことは大切なことだと思った。実際にボランティアセンターで活動したことは自分にとって大きな経験になった。同じ大学でも関わりのなかった先輩や同級生と話す機会ができて、仲良くなれた。ほかに、職員さんもらっしやって、大人の人と話すこともできた。また、受け付けは、ボランティアに来た人に説明する必要があるもので、どうすればわかりやすく話せるか考えて、ハキハキして話すこともあった。ボランティアセンターの運営には社会協議会の職員さんだけでなく、県外から今までも東北の震災の時も運営にかかわっていた人が来られていた。センターの開設したての頃はニーズの確保であったり、その後はニーズのあったところにボランティアの人が入って、少しずつ復興に向けた取り組みを行っていった。どのようにボランティアを動かしていくか学べた。そして、私が1番後輩に伝えたいことは、ボランティアをすることは素晴らしいことだということだ。私自身も人脈が広がり、初対面の人とでもたくさん話すことができるようになった。また、実際に現地に行ったことで、震災の悲惨さをからだで感じることもできるとともに、被災していても元気に前向きに進んでいる人の姿もあった。ボランティアをすることで日頃は学べないことをたくさん学ぶことができると思う。

これを伝えるには、実際にボランティアに行ってもらいたい。今、熊大でもボランティアの募集をしていることがある。しかし、知らない人も多いと思う。私も、授業中に先生から言われて気づいた。なので、もっと SNS を使って広めて行ったり、熊大の学生団体と手を組んだりして、1つのイベントとしてみんなが参加しやすい環境を整えていくことが大切だと思う。

# No.36

工学部 社会環境工学科 1年  
大内憲人

活動日時	平成 28 年 4 月 18 日 ~ 平成 28 年 7 月 24 日 (実働 140 時間・23 日)
活動場所	熊本市東区の真如苑熊本支部駐車場に設置されたボランティアセンターの東区サテライト / 熊本市東区内の住宅 / 熊本大学体育館

## 活動内容

4月18日から20日まで熊本大学の体育館でそこで泊まりながら学生ボランティアとして活動した。活動内容としては、避難してくる人や家に帰る人の受付、ごはんの配給の手伝い、トイレや廊下の掃除をした。

5月1日から8日のゴールデンウィーク中は熊本市東区の真如苑熊本支部駐車場に設置されたボランティアセンターの東区サテライトで運営スタッフとして活動した(午前9時から午後4時まで)。具体的には被災された方から送られてきた依頼書を見て依頼内容に適した人を一般ボランティアで来てくださった人の中から選ぶ。その後、活動内容や諸注意を一般ボランティアの人に説明し依頼者のもとに送るということを行った。5月9日から大学が始まったため週末ごとなど自分が行くことできる日(5月14,15,21,22,28,29日、6月4,5,11,12、7月3,24日)に活動をした(午前9時から午後4時まで)。活動内容はゴールデンウィーク中と基本的な活動は同じだが、ゴールデンウィークしか活動できない人もいたので運営スタッフに指示を出す活動も行った。また、一般ボランティアの方も減ったことにより、依頼者のもとに行って活動を行った。内容としては地震により倒れた家具、散乱した物や納屋の片づけを行った。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えたとしたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

私が今後、熊本大学に入学してくる後輩に災害支援活動での経験で伝えたいことは大きく分けて2つある。1つ目は他人との関わり方と、どんなに人とのつながりが大切かということである。運営スタッフとして活動している時に私は様々な人と関わる事が出来た。ボランティアとして来てくださった親子連れ、消防隊員、小中高生、海外の方、様々な地域の社会福祉協議会の方々など老若男女問わず色々な人たちである。しかしこのようにいろいろな考えを持つ人達がいる中でいかにスムーズに活動することは難しい。そこで私はまず相手の意見をよく聞き、そして相手の意見を尊重しながら自分に非があれば直し、相手が間違っていれば何が違うのかを説明してわかってもらうことに努めた。このように接していくうちに相互に相手のことを理解しあえるようになった。このことは普段の生活にも行うことができると思う。また、大げさかもしれないが運営スタッフと一般ボランティアとがつながって、復興に向けて進んでいるように感じられたので改めて人とのつながりは大切なものと実感した。2つ目は日常生活がいかに幸せかということである。私は被災された方の依頼書や依頼者のお宅に行きこのことを強く感じた。そこには、ついさきまで普段通りの生活がなくなっていた。私は今の生活を当たり前だと思うのではなく、この当たり前であることが大事だと思い今後の大学生活においてももっと積極的に様々な事をしていこうと思った。

これらのことを後輩たちに伝えるには今回みたいな報告会もいいが私はもっと多くの後輩に伝えたいので入学式等で冊子を配ったり、専門の授業で伝えるということである。具体的に私の学科は社会環境のことを学ぶのでそれに関連した内容に沿うように授業内で講義形式で行うというものである。

# No.37

工学部 物質生命化学科 1年

## 瀬上裕介

活動日時 平成 28 年 4 月 17 日 ~ 平成 28 年 5 月 8 日  
(実働 200 時間・20 日)

活動場所 熊本市東区役所

## 活動内容

1. 区役所が物資運搬の拠点になっていた為、各地から送られてきた支援物資の運び入れ、仕分け、配達を行った。
2. 区役所内にもたくさんの避難者の方がいたため、その人たちのお世話をを行った。
3. 区役所に物資を取りに来られる避難者の方もいたので物資の取り合いなどの混乱が起きないように物資を配布した。
4. 自衛隊の方が飲料水の配布に来られるのでその手伝いを行った。
5. 朝、昼、夜の食糧配給を行った。
6. 東区役所が罹災証明の発行に人手をとられたために、区役所の総合案内の手伝いを行った。
7. 沢山の人が罹災証明に来られていたのでその整理を行った。
8. 区役所付近の交通整理を行った。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えたとしたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

災害はいつ、どこで、どのようなことが起こるのかはほぼ予測することができないと思います。実際に今回の地震も誰も予期していないものだったと思います。だから災害が起こってから自分自身も戸惑いばかりで何をすればいいのかわからなくなりました。しかし、落ち着いて今自分が何をすべきなのかどのような行動をとればいいのかを考えると、おのずと答えは見えてきました。自分の周りには老人の方や、子供、女性など非力な人もたくさんいました。したがって自分がすべきなのは物資の運搬などの力仕事などだと気づき、ボランティアに参加しました。

ボランティアは環境の悪い中でやらなければいけないので、本当にきつい事が沢山ありました。しかし、様々な人からの感謝の言葉や笑顔をいただいた時はやってよかったと思いました。いまではこの経験はこれから社会に出て生きていくうえでとても有意義なことのように思います。

このようなボランティア活動などの災害支援活動の話は実際に行った人たちから聞くのが一番良いと思います。したがって今回あった災害支援活動の報告会のようなものを定期的に行うことによってより後輩たちに伝えることができると思います。

# No.38

工学部 建築学科 1年

## 那須亮太

活動日時 平成 28 年 4 月 17 日 ~ 平成 28 年 5 月 8 日  
(実働 108 時間・18 日)

活動場所 益城町総合体育館

## 活動内容

- ・益城町総合体育館周辺に設置されている簡易トイレの水くみや清掃。
- ・避難されている方への炊き出しの配膳。
- ・各地から運ばれてくる支援物資を二階にあるサブアリーナまで運ぶ作業。
- ・サブアリーナまで運ばれてきた支援物資の、種類ごとの整理と数の確認。
- ・車中泊をされている方への炊き出しのよびかけ。
- ・体育館に避難している子供たちを対象にしたレクリエーションの企画と運営。
- ・体育館全体の整理整頓と清掃。
- ・支援物資を必要としている方への配布と数の調整。
- ・朝、昼のラジオ体操のお手伝い。等々

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えたとしたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

自分は結構長い時間、益城町総合体育館でボランティアをさせていただいたので、本当に多くのことを経験できたし、いろんなことを学ぶことができた。そんな中で自分が後輩に伝えたいと思うことは 3 つある。

1 つ目は、自分で考えて積極的に行動にうつしてほしいということだ。災害支援活動中には様々な予期せぬことが起きる。そんな時、誰かの指示を待っていると手遅れになってしまうことも考えられる。その時々、今何が必要で、どのような行動をとるべきか自らの頭で考えて、積極的に行動してほしい。

2 つ目は、いった場所で出会ういろんな人とコミュニケーションをとってほしいということだ。避難所では震災によるストレスに悩む人が少なくない。人と話すことで多少なりともそのストレスを軽減することができるし、だれがどのようなものを必要としているか把握することができる。

3 つ目は、人とのつながりを作ることができるということだ。実際、自分も益城で一緒にボランティアをした人と大切なつながりを作ることができた。その人たちとは今でも連絡をとりあって、時々集まったりしている。避難所で出会う人々とのつながりを大切にしてほしい。この経験を後輩に伝えていくためには SNS を活用して伝えていくことが効果的だと思う。SNS が広く普及している現在、自分の経験を当時の画像や動画などをつけて発信していくことで、自分のこの経験を後輩たちに伝えることができると思う。熊本地震で被災したというこの経験を忘れてはならない経験として、後輩たちに伝えていけたらと思う。

# No.39

工学部 建築学科 1年  
段原一仁

活動日時 平成 28 年 4 月 17 日 ~ 平成 28 年 5 月 5 日  
(実働162時間・19日)

活動場所 済々黌高校

## 活動内容

震災後一週間ほどは済々黌の水道が止まっており、トイレなども流せない状態だったので済々黌のプールにたまっていた水をでかいバケツに移し各トイレの前に配置しそこに置いた小さいバケツででかいバケツの水をすくって、排出物を流してもらった、バケツの水の補充は一日のシフトを決め交代でおこなった。

また、朝昼晩に食事の配給をおこなった、この食料は他県の方々や避難者の家族が寄付してくれたもので、その量はありがたいことに大変多かったため、配給が不足することは少なかった。震災直後は不足もあったが、すぐに各地からの寄付や大量のおにぎりを届けてくれる近隣のカフェの協力もあり配給は充実していた、これは避難者やボランティアの学生個人個人の人のつながりをとても実感できるものだったので大変すばらしいものだと感じた。

その他の活動としては、避難所の子供たちと遊んだり、高齢の避難者の家の片付けを手伝ったりもしました。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えるとしたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

地震のみではなく、火事、大雨など私たちの日常はいつどんな災害が起こっても不思議ではない、ということを私は今回の熊本地震から学びました。そして災害を一人で乗り切るのは非常に困難なことだと感じました。誰も一人では不安で恐怖心かられるという状況に災害時はなると思います。そうなったときのために普段から心がけていて欲しいのは、まず、各災害時の自分の家から最寄りの避難所がどこにあるかを把握しておくこと、災害時によくあるトラブルへの対処方を知っておくことです。災害時に最も精神的にきついことは一人であることです。そのために最寄りの避難所は必ずチェックしておくようにしてください。また、地震時などに一時的にドアが開かなくなったりするとき、余震を利用してあけるなど災害時によくあるトラブルについて知っておくことでパニックになることを避けられると思います。また、災害時に仲の良い友人や、両親の安否が気になったり、または自分のことを心配してくれた友人や両親から安否確認の連絡が来ると思います。しかし、災害後すぐに安否を確認しようとして連絡をとろうとするのは控えるべきだと思います。その理由は災害直後は連絡をとる暇などなく、連絡を取ろうとした側に不安感を与えるだけになってしまうからです。自分の大事な人の安否が気になる気持ちはよくわかりますが、信じて連絡が来るのを待つか、もしくは災害からしばらくたってからの連絡をとることが大切です。そして、避難所での生活は困難なものです。熊本大学に入ってくる後輩たちにはぜひ災害が起こったとき、率先してボランティアを行ってほしいです。国や県の人でも力の限りのサポートを行ってくれますが、どうしても人手は不足してしまいます。なので若い力をぜひ人のために使ってほしいです。しかし、地震の恐怖でボランティアどころではないという人もいます。災害時には無理をしないことも大切です。無理をせず今の自分にできることを行ってください。上に述べたようなことが私が、これから熊大に入ってくる後輩たちに伝えたいことです。私はこのようなことを、サークルや学科で知り合うであろう後輩たちに伝え徐々に広げていきたいと思っています。

# No.40

工学部 物質生命化学科 1年  
濱田翔平

活動日時 平成 28 年 4 月 17 日 ~ 平成 28 年 4 月 28 日  
(実働110時間・11日)

活動場所 うまかな・よかなスタジアム  
桜木東小学校

## 活動内容

支援物資の仕分け

避難所の運営全般（食事、掃除など）主に食事の準備や支援物資を配ったり整理したりした。

また、食事の手配や調理もおこなった。空いた時間は、避難している子供の世話などした。また、トイレ掃除などの衛生面の管理もした。基本的には、すべての運営は大学生のみでおこなった。ある程度の生活の基盤ができたため市役所の方と交代した。朝は6時に集合し、りんごをむいたり朝食の準備をしていた。たまに、支援で励ましの芸を見せに来てくれる方もいたので、一緒に手伝いもおこなった。また、避難者が多すぎたときに他の避難所で受け入れてくれるか連絡したりもした。人手が足りず食事の配給がスムーズにいかなくなったりしたため文句もあったが親切な避難者の方がつだってくれた。子供たちとは鬼ごっこにかくれんぼなどした。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えるとしたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

地震での経験を生かして DVD をつくり残していけばいいと思う。また地震があったときどう行動するかが大切。地震が起きたとき自分はバイトをしていて益城町で震源地と知り焦ったが一度このような経験をしたのでこれからさき冷静に物事を考えていけると思う。不謹慎ではあるが自分はいい経験になったと思う。次同じような事があっても率先して動けると思う。常に先のことを考えて動くことを学んだ。また、大学も協力してこの局面を乗りきったので後輩にはそういった熊大のチームワークの良さを知ってほしい。

# No.41

工学部 物質生命化学科 1年

黒木 駿

活動日時 平成 28 年 4 月 16 日 ~ 平成 28 年 5 月 8 日  
(実働 105 時間・16日)

活動場所 清水中学校  
益城町総合体育館

## 活動内容

私は本震が起きた後、地元の中学校に行きました。そこには 300 人程度の避難者の方々がいらっやあって、中学校の職員の先生や卒業生と一緒に活動をしていました。そこでは、主に食事を作ったり、配給を行ったり、避難所では運動不足になりがちであるので、座ってできるような運動を教えたりしていました。そこで1週間程度活動をした後、益城町総合体育館に行きました。益城町に初めて行ったときは想像を絶するほどの被害の大きさに衝撃を受けました。益城の体育館はYMCA の人や熊本ヴォルターズの人が管理しており、その人たちと一緒に活動をしました。活動内容としては、多くの物資が運び込まれてきたのでその運搬や整理・管理を行ったり段ボールベットというものを作り運んだり、トイレなどの衛生管理、入居者の移動の手伝い、食事の配布を行いました。何度か体育館に泊まり込んで活動をしたこともありました。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えるとしたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

まず初めに、伝えた方が良く考える経験について述べたいと思います。地震後私たちの生活は非常に不便なものになりました。ガスは止まり、水も止まり、一時的にはありましたが電気も届かなくなりました。その時の生活はとても大変でした。そこで、いつもの私たちの生活は当たり前ではないということ、そして日常生活に感謝する心を持つことを伝えたいと思います。また、地震が起きた後の私たちがどのような活動をしていたかを伝えるべきだと思います。地元に戻って募金活動をしたり、実際に現地に行って、避難所の運営やがれきの撤去をしたりは想像もつくかもしれませんが、今回の報告会でもあったような、観光地に人を呼び込むための活動や仮設住宅に住む方々のアンケート調査などのボランティア活動もあるということを伝えたいです。熊大にこれから入学する人がいろいろな活動があることを知れば、自分も活動したいと思い積極的にボランティアに参加するようになるのではないかと思います。

では次に、伝えたいことをどのようにして伝えていけばいいかを述べたいと思います。地震から時間がたてばたつほどその記憶というのは薄れていくものだと思うし、触れる機会も少なくなっていくと思います。そこで定期的に今回のような報告会を年に一回でも開催すればいいなと思います。また、熊本大学には県外からの入学者も多くいるので初めに知ってもらうためにも、入学式の内容の一つとしてクマリズムさんであつたりくま助さんの活動を発表するのもいいなと思います。そうすれば入学者全員が入学時に一度は熊本地震について知り、考える機会になるのではないのでしょうか。さらにもう一つ、熊本地震の発生とその後の大学の活動をまとめた簡単な資料を作り、それを入学者全員に配布するのもいいかなと思います。

これから入学する皆さんが少しでも熊本地震について知り、ボランティア活動に取り組み、少しでも復興が早まればいいなと思います。

# No.42

工学部 建築学科 1年

三浦 萌子

活動日時 平成 28 年 4 月 21 日 ~ 平成 28 年 5 月 8 日  
(実働 105 時間・15日)

活動場所 花畑町ボランティアセンター/  
益城町 / 五福小学校

## 活動内容

主な活動としては、花畑町のボランティアセンターの運営だった。私は受付班であり、ボランティアの方の情報を集めたり、保険に加入していただいたりなどを混乱が起らないようスムーズに行われるような活動をした。基本的に受付班の中でも、受付係・誘導係・データ統計係などに分かれ、ローテーションで役割を回した。また受付が一通り終わると、ボランティアを終えて帰ってこられた方からボランティアの報告を受け、改善点や現在の支援先の状況などをまとめ、上に報告した。さらに余裕があった時は、実際に支援先に赴き、清掃活動やがれきの撤去作業を行なった。

また、この活動とは別に、建築学科のボランティアとして、避難所の間仕切り作業を行なった。避難所では、まずそこに住まれている方に許可をいただきものを避けながら柱やカーテンなどを組み合わせて設置した。さらにこれらの材料は莫大な数が必要だったため、材料を切ったりするところから参加した。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えるとしたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

まず熊本地震のような大災害はなかなか起こらないと思う。だからこそ、この体験を劣化させず何代も下の後輩にもリアルな情報を伝え、心構えをしてもらう必要がある。

大学生は時間も体力もあるため、今回のようにたくさんの方がボランティアをすると思う。私は災害ボランティアをしたのは今回が初めてだった。みんなが動転している中でのボランティアセンター運営は正直非常に気疲れした。運営が始まってすぐはニーズも集まらず、手持ち無沙汰なボランティアの方に不満を言われた。こっちはいいことをしようとしてボランティアをしているのに、不満を言われたり運営の体制について責められたりするなど思いもしなかった。しかし、いろんな人に感謝されたり、学ぶことは多かったり、たくさんの人と知り合えたことなど、不満の倍、得たものは多かった。

こうした経験を後輩に伝えるために、授業に取り入れてみるのが有効だと思う。私は前期と後期で、「減災リテラシー」[減災型地域社会づくり]という授業を取っている。これらの授業では、熊本地震にとどまらず様々な災害に触れ、被害状況や避難所運営、災害弱者と呼ばれる人たちに対する支援の取り組みなど様々なことについて学べる。また前期は授業の一環として被災された農家を訪れ、椎茸の原木を立て直す作業をしたりした。後期では阿蘇の被災地を訪れる予定だ。このような素晴らしい授業に、生徒の体験を織り交ぜることでさらに理解しやすいものになるのではないだろうか。生徒目線というもので受け入れやすいし、親近感もあり、また、生徒にしか感じられないこともあるだろう。さらに、生の声を取り入れることで危機感や緊張感を増し、授業の集中力が上がることも見込まれるため、相乗効果が得られるはずだ。

報告会で 416 の方が熊本地震の冊子を作っていた。確かにとてもいいものだし、形にも残る。だがその分コストがかかるのと、何より一定数はいるであろう興味のない人には効果がない。そうした人たちも巻き込むために授業で取り込んでみると、少なくとも単位のために授業を聞く必要がある。こうして話を聞いてみることで興味を引き出す糸口になるかもしれない。

# No.43

工学部  
物質生命化学科 2 年  
生野友梨

活動日時 平成 28 年 4 月 24 日 ~ 平成 28 年 5 月 8 日  
(実働 56 時間・7 日)

活動場所 花畑公園

## 活動内容

私は、前震発生一週間後から花畑公園に設置された災害ボランティアセンターで運営のお手伝いをしました。社会福祉協議会の方たちの指導のもと、複数の班に分かれて被災地へボランティアの方々を送り出しました。私がボランティア活動に参加したきっかけは、SNS を通して熊本のために動きかけをしている大学生がたくさんいることを知り、自分にもできることがないかと考えていた時に友人と一緒にボランティアをしないかと声をかけてくれたことでした。その友人と私は、誘導班に配属され多くの方を手伝いの必要な地域に送り出す手伝いをしました。主に、市電や貸し切りバスへの案内、徒歩や自家用車の方の誘導を行いました。送り出した後は、帰ってこられた方たちからボランティア先での活動の様子やさらに必要なニーズについて伺いました。ボランティアの方たちが的確に教えてくださったので、私たち運営ボランティアは翌日からの活動で改善点は直したり足りないものを補ったりすることができました。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えるとしたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

これから熊本大学に入学する後輩に、今回の災害支援活動での経験を伝える方法として私は二つの方法を考えました。まず一つ目は、自分が在学中の後輩に対して紙媒体でのリストを渡すことと実際に自分が地震を経験して起きた出来事や思ったことを話すということです。リストは、具体的には地震が起きたときとその後の生活で必要だと思ったものや今のうちから準備しておいたがよいと思うものをまとめたものです。まず私が必要だと思ったものは、生活用水です。私の家は、断水が続き水不足に悩まされました。東日本大震災の時に、水不足になったと知っていたのでお風呂に水をためたりしました。飲料水の確保が難しかったので、後輩たちには飲料水は常に家にストックしておいたほうが良いと伝えたいです。二つ目は、SNS や Web サイトの活用です。SNS は多くの方が目にするため、時間がたった後の新入生にも伝えられると思うからです。また、Web サイトでは関連したサイトをリンクしておけば地震や防災の知識も身につけて、よいのではないかと思います。一方で、SNS や Web サイトは信用性が低いのが問題であると思うので、個人での情報発信というよりは、地震情報サイトや地震関連アカウントという風にサイトやアカウントを複数人で運営するのが良いと思います。私がこれらの方法で伝えたいことの一つは、運営ボランティアを通して学んだことです。ボランティアをしていて、多くの方とお話をしました。その中には、自分は東日本大震災を経験したという方や関西・関東から来たという方もいらっしゃいました。このように、県外から訪ねてきて熊本のことを助けてくださった方々がいることも知ってほしいと思いました。その方たちからの励ましがとても大きな力になって私たちの心も助けてくれたことを伝えたいです。そして、何気ない日常が一番尊いものだと、私は深く実感したのでそのことも伝えることができるといいなと思っています。

# No.44

工学部  
機械システム工学科 2 年  
石本瑛寛

活動日時 平成 28 年 4 月 16 日 ~ 平成 28 年 5 月 8 日  
(実働 168 時間・28 日)

活動場所 熊本県内

## 活動内容

日本赤十字社災害対策本部内に災害ボランティアセンターを開設。大きくは日本赤十字社災害対本部及び熊本県支部の応援である。具体的な活動内容は主に 4 つある。1 つ目は、医療班 (救護班) 等の先導を行った。急性期はカーナビがほとんど使えない状況であったため、地元の土地勘がある人が他県からの応援部隊を先導したほうが良いという判断からだ。2 つ目は、日赤が備蓄している物資 (毛布や安眠セット、ブルーシートなど) の配布や救護テントの設営などがある。行政や各避難所からいただく情報を基にできるだけ迅速に救援物資を配布した。3 つ目は、社会福祉協議会等が運営している災害ボランティアセンターの応援だ。運営スタッフが足りないということを受けて、派遣した。他に、救護班に帯同し、各避難所のアセスメントを行った。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えるとしたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

恥ずかしいことに、この熊本地震を経験するまで、まさか熊本で自分がいる間に大規模災害が発災するとは思っていなかった。そのため、他県で何かあった時に救助者として活動することは想定していても、自分の県で発災して自分の県で災害対策本部が立つことに対してあまり訓練ができていなかった。ほとんどが初めての経験であったために、その時点ではベストな判断をしたつもりだが今振り返ると本当に正しかったのか疑問に思う判断がいくつもある。まずは活動した我々がしっかりと反省をして問題点を洗い出すことからスタートするだろう。洗い出されたものを次の大規模災害に備えて今から研修会等で後輩に伝える。自分の所属している赤十字の団体では、11月中旬に研修会を開いて今回得た教訓をまずは九州内の大学生に伝える活動をするが、そのような活動も有効ではなからうか。上記のように具体的に活動内容を伝えるとともに、もっと抽象的に、災害を自分事として考えることも大切だ。大規模災害は残念なことに時々私たちの想定をはるかに上回ることがある。そのようなときに、柔軟に対応できる力を持つておくことが重要だ。そのためには型にはまった訓練を繰り返すことも非常に重要ではあるが、災害を自分事として常に考えておき、自分なりに様々な活動を積極的に展開することがより大切になってくると考える。これを後輩にしてもらおうというのは、非常に難しいと思う。しかしながら、熊本地震以上の大規模災害が来たとき、きつと役に立つはずだ。私の団体ではこのようなこともプログラムとして研修会に取り入れたいと思う。ぜひ熊本大学の学生にも受けていただきたいと考える。

# No.45

工学部  
機械システム工学科 2年

宮崎孝太

活動日時 平成 28 年 4 月 16 日 ~ 平成 28 年 4 月 30 日  
(実働 114 時間・17 日)

活動場所 熊本大学体育館 / 済々黌高校体育館 /  
黒髪小学校体育館 / 桜山中学校体育館

## 活動内容

私は震災直後から学生団体である紫熊祭実行委員会の一員として、避難所の運営にあたりました。主な活動内容を挙げると、震災が起きてすぐからは、避難所開設後に避難者の避難所内への誘導、避難所に入れない人たちのためのブルーシート配布、避難者の安否確認、体育館内に不審者等が出ないか確認するための夜間警備などをおもに行っていました。また、熊本大学の体育館内の避難所の運営が安定してからは、救援物資の配給の手伝いや、新たに避難所に避難してくる方の受付、避難所内の清掃活動、避難所に避難されている方たちの健康状態の確認や救援物資の内、使えるものと使えないものの仕分け、物資の数の確認などを行いました。また、熊本大学の体育館だけでなく、済々黌高校、黒髪小学校、桜山中学校などで、避難所の運営、給水車による給水の手伝い、駐車場の車両整理、不審者が出ないかを確認するための夜間警備などを行いました。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えるとしたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えるとしたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるかについては、災害支援活動を体験してもらうのが、一番効果的だと思う。なぜなら、災害支援活動を行ってきた、やってみないとわからないこと、伝えられないことが数多くあったからである。例えば、実際に被災して家が壊れてしまった人、倒壊した家屋などを見て感じるのと、スライドショーで見せられる画像とでは絶対に受ける印象は変わってくるはずだ。そして、後輩たちに伝えなければならないのは、前者の経験である。そのため、災害支援活動の経験を伝えるには、情報だけでなく、実際に自分で体験してみなければならないと思う。まだ復興が進んでいない地域に行ってボランティアに参加したり、実際に復興の進んでいない状態を見たりすることによって、実際に体験してもらうと、より多くの災害支援活動での経験を後輩に伝えられると考える。また、もう一つの方法としては、今回のように、社会連携科目として、単位という形で学ぶ機会を設ける、という案である。実際、熊本大学付近では目立った大きな被害もなく、地震による恐怖さえ、実際に体験した人でも忘れつつある。このような状況の中で学生により興味を持ってもらうには、やはり単位という形をとるのが一番効果的だと考える。学生に興味さえ持ってもらえれば、経験を伝えていく手段はいくらでもとれると思う。もちろん、ただの「単位を取るための作業」にならないようにしっかりと学習内容を考えないといけないが、実際に震災の被害にあった人に話をしてもらう、それこそ今回の報告会のように学生が行っていた活動を取り上げることで、後輩にも興味を持ってもらえるのではないかなと思う。

# No.46

工学部社会環境工学科 2年

大坂洋平

活動日時 平成 28 年 4 月 18 日 ~ 平成 28 年 8 月 15 日  
(実働 約130日)

活動場所 理髪店 D-BOY 健軍店 / 桜木小学校 / 竜南中学校 / 熊本市ボランティアセンター / 益城町保健福祉センター (はびねす) / 益城町総合体育館 / 二の丸公園 (ねぶた祭り) / NPO 法人 IKIMASU 本部 / NPO 法人 熊本友救の会特設テント / 個人宅×4 / 広安西小学校 / 御船町ボランティアセンター / 美里町ボランティアセンター

## 活動内容

本震後二日、熊本大学の熊助組の太田から市社協がボランティアセンターをたてる準備をしていることを聞いたので、twitter でボランティアを募集し、ボランティアセンターが開設されるまでは、中央区の指定避難所に電話をかけて、各地にボランティアとして派遣、また D-BOY 健軍店を本拠地にしているボランティア団体が物資の支給を行っており、うまかなよかなスタジアムでも物資の支給を行っていたので、派遣し、私も手伝いに行った。その後ボランティアセンターが開設したので、その時、各避難所で固定でボランティアに行くようになっていた人以外はボランティアセンターに入るように促した。事前に呼びかけていたこともあり、100 人近くに運営スタッフとして入ってもらうことが出来た。ボランティアセンターでは主に花畑広場ではマッチング、集計、バイザーを担当。東区サテライトでは、マッチング、集計、ニーズ整理。南区サテライトでは、サテライトの立ち上げも補佐、マッチング業務を担当した。夜間は竜南中学校で夜警をした。学校が始まって以降は熊助組の活動に参加しつつ、益城町で子供と遊ぶボランティアを考えていたのだが、益城町保健福祉センター (以下はびねす) に常駐しているボランティアが一人しかいないということで、授業終わりから午後 12 時までの間、はびねすで避難所運営の補佐をした。主に物資の管理、お年寄りや子供の話し相手、小中学生対象の学習支援、適宜問題が起きた時に現地で活動しているボランティアや近隣の避難所に応援を要請、仮設住宅の担当に、避難民の意見、要望やその傾向などを伝えるなどを行った。

はびねすは 8 月の中旬に避難所としての役割を終えることになったので、それまで 3 か月ほどそこをメインとしてボランティアを行った。その後は、はびねすにいた頃に知り合ったボランティア団体のついで、ねぶた祭りや、農業ボランティア、熊助組や kumarizum の活動などを単発的に行っている。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えるとしたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

これから熊本大学に入学する後輩に伝えるにはその時もボランティアをすること、それを発信すること、またボランティアに来てもらった後輩に伝えることが、何よりも効率的に良く伝える方法であると考えている。また定期的に講演会やワークショップを開くことも重要であると考えている。これから先、特に被害の小さかった熊本市内では地震の話をするのは少なくなっていくと考えられる。そうなれば地震の記憶は次第に薄れていき、場合によっては、同じ熊本であるのに、復興し終えてないところと完全に風化してしまうところが出てしまうかもしれない。県外から来る人がいなくなっても、せめて県内の人たち同士では復興し終えるまでの継続的な支援をしなければならない。そのために伝えることが必要になってくる。私は、今までのボランティアやその時の地震の深刻さだけでなく上記の事を徹底して後輩に伝えようと思う。

また、現在行われているボランティアや今のニーズ、熊本大学で積極的にボランティアを行っている団体やサークルなどの紹介も並行して行っていきたい。私は今、前の講演会で発表していた熊助組と kumarizum、あと熊助組から派生したサンフラワーというボランティアサークルに所属している。ということもあって紹介や勧誘はしやすい立場にいる。またボランティアの募集の情報や現在のニーズも得られる環境にいるので、より積極的に後輩に限らずほかの先輩や同輩にも積極的に伝えていくことも大事である。

# No.47

工学部  
機械システム工学科 2 年  
興梠春花

活動日時 平成 28 年 4 月 16 日 ~ 平成 28 年 4 月 30 日  
(実働 114 時間・15 日)

活動場所 熊本大学体育館 / 済々黌高校体育館 / 益城町の田んぼ

## 活動内容

私の行ったボランティアは熊本大学体育館が避難所になってからの運営に関する部分である。本震が起きたあとの3日間、私の所属している学生団体紫熊祭実行委員会やその他の学団体が協力して熊本大学の避難所を運営した。運営を市役所の方にバトンタッチした後も自分のできることをボランティアとして行った。私が行った活動は受付や誘導、トイレ清掃である。受付とは体育館に入って来られる方の人数などを把握するために入口で名前を確認する活動だった。誘導は物資の配給の時などに混雑を防ぐために避難されてきた方をうまく整列できるようにする活動であった。本震直後の3日間は避難者の人数も多く、トイレの汚れる頻度もかなり多かったため、トイレ清掃は特に力を入れて行った。そのほかにも朝起きてから避難者の方におはようございますというあいさつとともに体調が悪くないかどうかなどを聞いてまわったり、時にはお話相手になったり、避難者の方の心の不安を少しでも軽くすることに努めた。済々黌高校の避難所に行った際には、配給のおかゆなどをついだりお皿を洗ったりする活動を行った。ほかにも米農家の方の草刈りボランティアにも参加した。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

震災が起きてからの避難所での活動を通しての経験で一番印象に残ったのは人とのつながりである。震災直後はそれまではあまりそこまで仲の良くなかった友達や会ったことのなかった人と協力しあって活動を行った。また、避難されてきたお年寄りの方や小さい子どもたちと交流する機会も多くあった。また、熊本大学の職員の方、市役所の方など本当に多くの人との出会いがあり、様々な人と様々な話をする中で得るものは多くあった。人のあたたかさもたくさん感じる事ができた。例えば、トイレの清掃中に通りかかった避難者の方が「ありがとうございます。助かります。」とよく声をかけてくださった。また、私がほうきで掃いていると、私にも手伝わせてくださいと言ってくださり、お手伝いをしてくれる方もいた。トイレの清掃は楽しいものではないし、本震直後はかなりの頻度で清掃しないとイケなかったのも、その声掛けは本当にこころあたたまるものがあつた。ほかにも受付に座っていると、避難所を出て家に帰る方が感謝の言葉をくださった。その言葉をきくとボランティアできつい思いをしたことも吹き飛んだ。

避難所の運営のお手伝いをしなければ出会えなかったような人と出会えたことが私の中では大きな財産となっている。ある程度落ち着いた頃に中学生がボランティアとして遊びに来るようになった。一緒に清掃をしたり、一緒に遊んだりして仲良くなった。当時は入学したてで敬語もうまく使えなかった中学生たちと紫熊祭のときに再会した。敬語も使えるようになって楽しそうに学校のことを話してくれた。また一緒に遊びたいものである。また避難所でお世話になった熊大の職員の方の紹介で稲の雑草刈りのボランティアにも参加した。農家の方も感謝して下さり、おいしいおにぎりもいただいて貴重な経験となった。

このように避難所でなければ出会えなかったような人と出会うことができ、様々な交流ができたことは私のなかで良い経験になったと思う。この経験をこれからのサークル活動などで出会った後輩に自分の言葉で伝えることができればいいと思っている。

# No.48

工学部  
情報電気電子工学科 2 年

活動日時 平成 28 年 4 月 16 日 ~ 平成 28 年 4 月 30 日  
(実働 98 時間・15 日)

活動場所 熊本大学黒髪キャンパス体育館

## 活動内容

熊本大学黒髪キャンパス体育館において、紫熊祭実行委員会として避難所の、運営を行った。主な活動内容としては避難所の受付、避難者の体育館誘導、夜間警備を含める避難所見回り、トイレ清掃等の衛生管理、物資の管理及び配給。学生団体での避難所運営が終わった後は、避難所の夜間受付・夜間警備を行った。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

【経験】私が今回の震災を通して経験したことは、緊急時のボランティアの大切さだ。私が本震後、武夫原グラウンドに避難したときにはすでに多くの人が避難しており、パニックの状態だった。そこで指揮をとって動いていたのが紫熊祭実行委員の方々、体育会の方々、養教・看護学科の学生だった。近隣の家族連れや高齢者の方を体育館へ誘導し、体調不良の方の対応を行うなど本当に心強かった。この学生たちの姿を見て近隣の方々も安心ができたようだった。また、ボランティアを通して人と人とのつながりの大切さも重要だと感じた。自分も被災者でありながら、近隣住民の方を支えることに最初は戸惑いを感じた。しかし、同じ不安を抱える人と一緒にボランティアを行ううち、自分の中にあつた地震に対する不安も和らいだ。ボランティアを通して、不安を抱えている人を支えているだけでなく、自分も支えられていると感じた。また、避難された方々の安心した表情を見ると非常にやってよかったと感じた

【伝え方】自分たちの経験を講演会・講義等で、言葉で伝えてもいざと言う時に活用できないと意味がないことが今回の震災を通して分かった。私はボランティアの際に、ネットを利用し、東日本大震災時の経験を見て、私たちの活動に生かしてきた。この経験からも、文字としてまとめて伝える方法が一番良いと考えた。多数の人が見ることのできるネット上には、ボランティアを行う上の必要最低限の知識をまとめたり、私の経験したボランティアの様子を記録したり、数が限られる文献には指示を与える側の注意点をまとめて置いたり様々な手段で様々な人の意見をまとめることが良いと考える。

# No.49

工学部 物質生命化学科 3年

## 平川大希

活動日時 平成 28 年 4 月 17 日 ~ 平成 28 年 4 月 27 日  
(実働 130 時間)

活動場所 熊本大学避難所  
手が足りてない避難所 (済々黌高校などに臨時的に出前ボランティア活動をしました)

## 活動内容

具体的には、ゴミの収集・整理や掃除、要介護者の補助 (トイレの付き添い、食事の手伝い、ベッドへの移動等)、支援物資の仕分け・管理・分配、避難所の受付対応、夜間警備、避難されている方々へ質問し、それをまとめる (何かこの避難所内で困っていることはないか? ボランティアの人達への要望・意見・不満などはないか? 何かアレルギーや配慮してほしいことはないか? 等)、子供の遊び相手を努める、特定の支援物資の買い出し (自費です。生理用品からお菓子まで分野は多岐に渡りました)、SNS を使った避難所の状況やボランティアの追加募集について等色々な情報発信等を行いました。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えといたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

- ① 「ベーシック (一年前期に受ける熊本大学について学ぶ科目のこと)」のカリキュラムの中に「災害支援活動報告及び熊本地震について」みたいなものを組み込む。
- ② 入学式や、学科式 (学部式) などで実際にボランティア活動を行った団体 (紫熊祭や熊助組等) に災害ボランティア活動について発表を行わせる時間を設ける。
- ③ 「災害支援」みたいな名前でも必修教養科目にして熊本地震について色々教育を施す。
- ④ 図書館などで熊本地震についてのイベントを行う。
- ⑤ 掲示板に貼りだす。
- ⑥ 学生便覧等、何か配布物を配る際に一緒に熊本地震におけるボランティア活動についてまとめたものを配布する。

伝えることとしては

- (i) 実際にを行ったボランティア活動について (全日時・場所・ボランティア活動始動までの経緯・ボランティア活動の実例・状況等)
- (ii) ボランティア活動で学んだこと、考えたこと、反省点
- (iii) もしまた熊本で大きな地震があったらどうすればいいか (どうして欲しいか)

個人的には、この話を聞いて後で軽くレポートを書かせるかその場でグループを作って、グループ内で意見交換・発表をさせたりしてもいいかなと思います。

# No.50

工学部  
情報電気電子工学科 3年

## 山田七生

活動日時 平成 28 年 4 月 14 日 ~ 平成 28 年 4 月 29 日  
(実働 105 時間・15 日)

活動場所 熊本大学武夫原グラウンド  
熊本大学体育館

## 活動内容

地震発生当日は避難のために武夫原グラウンドに向かい活動を開始した。最初は、同じく武夫原に避難してきた人々のために座れるようにとブルーシートを持ってきて敷く作業から始まった。その後、体育館へと移動し、それ以降の活動は体育館内で行った。体育館内での仕事は避難されてくる人々の受付や誘導、体育館内の整備と警備、そして送られてくる支援物資の管理と配布、そして避難してきた子供たちのお世話である。受付では避難してきた方々の人数確認や案内、誘導は靴を入れるための袋の配布や、聞かれた場所の案内などの質問受けなどを行った。体育館内の整備はブルーシートの設置や電源の管理、トイレの清掃等、警備は体育館内の見回りをおこなった。支援物資の管理は、個数の確認や支援物資をしてくださった方々との連絡、配布は世帯の人数に合わせて必要個数の配布を行った。子供のお世話は 2 歳から中学生ほどまでの子供たちと遊んだり、一緒にボランティア活動を行ったりした。これらの活動を紫熊祭実行委員の委員長を中心として、シフトを組んで交代しながら行った。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えといたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

一つ目に、今回の震災を経験しボランティア活動を行う過程で、私が一番よかったと思ったことが、震災直後に連絡をすぐに取れる友人がいたことである。人生で初めてあのような大規模な地震を経験し、不安が多くなっていく中、すぐに友人と連絡をとり、一緒に避難できたことでその不安を少し取り除くことができた。また、友人らのおかげでボランティア活動を行うきっかけもでき、多くの避難された方々から喜んでいただけることで、私たち自身も安心することができた。そのため、大学に入学したらまずは友人を見つけることから始めるべきであろう。震災のときだけでなく、困ったことがあればいつでも相談できる友人がいれば、安心してより楽しい大学生活を送ることができるはずである。

二つ目。ボランティア活動中は体育館という慣れない環境での生活を余儀なくされた。そのため、体調を崩してしまう人も少なくなかった。体調を崩してしまうと、その分働ける人が世話をしなければいけなくなる。体育館内での生活は極めて非日常的なものだったため、体調を崩しても仕方はなかったが、崩さないに越したことはない。何をやるにおいても一番大切なのは自分自身の体調管理である。大学生になって、一人暮らしを始める人も多い。そのため、生活リズムも崩れがちになる人が多いが、体調管理だけはしっかりしておくよう伝えたい。

最後に、今後二度とあのようなことがないと祈っているが、もし、また大きな地震が発生しても大丈夫のように、もしもの時の必要最低限のものリストを作っておいたら発生したときに準備に焦らなくて済むはずである。私自身、避難時に延長コードを複数体育館に持って行ったが、コンセントに限りがある体育館内ではスマートフォンの充電などに非常に重宝された。

これら三つが、私が後輩に伝えたいことである。これらを伝える方法として、サークル内で入ってきた後輩に直接伝えたり、SNS を通じて拡散していく方法が挙げられる。震災時も、多くの情報を SNS から仕入れていたため、SNS を用いれば後輩という範囲にとどまらず、多くの人々に経験を伝えることができるはずである。

# No.51

工学部  
情報電気電子工学科 3年

## 野正裕介

活動日時 平成 28 年 4 月 14 日 ～ 平成 28 年 4 月 26 日  
(実働 90 時間・10 日)

活動場所 熊本大学体育館 / 済々黌高校 / 桜山中学校 ほか

## 活動内容

私は紫熊祭実行委員の一員として、主に熊本大学体育館の避難所運営を行いました。

熊本大学避難所

武夫原グラウンドに集まった避難者の方々のために実行委員の備品であるブルーシートを用意し、使用してもらうよう配布する活動。体育館内には避難できる人数が限られているため、お年寄りの方や子供連れの方や妊婦の方を優先してもらうような入口での呼びかけ。

体育館内の見回りと警備体育館内での支援物資等の配布

県内外から直接支援物資を持ってきていただいた方の受付

夜間に体育館に訪れる方に、不審人物がいなかなどの受付と警備、物資の運搬 など

済々黌高校避難所：体育館内の見回りと警備

桜山中学校避難所：体育館内の見回りと警備

学校周辺警備の他にも、地震によってグラウンドが使うことができなくなった小学生のために体操のお手伝いをするなどしました。

## 災害支援活動での経験を、これから熊本大学に入学する後輩に伝えたとしたら、どんな経験を、どのような方法で伝えるか

私は今回起きた地震の際に行った活動で、多くのことを学びました。まずは人との協力の大切さです。熊本大学体育館避難所の運営は、地震発生当初から複数の学生団体の協力によって行われました。私は紫熊祭実行委員会に所属していますが、生協組織部・体育会・法学部志法会などの団体の協力なしには運営できなかったと思います。また、このような非常事態にも関わらず、多くの方がパニックを起こさず、秩序を守り冷静に避難活動をしていたところにも感動しました。

しかし、私たちの活動に対して、気に入らないことがあるなど苦言を呈される方も避難されている方の中にはいらっやいました。私は直接不満をぶつけられた中のひとり、この活動をもうやめてしまおうか、自分も早く県外の実家へ帰ろうかとも思いましたが、県外では避難した熊大生の友人などは募金活動など、県外から可能な災害支援活動を行っており、避難所にいる人にしかできない活動をしなければならぬ、自分の活動は正しいことだと考え避難所にとどまり活動を行おうと思いました。

災害支援の活動は半年以上経った今も継続して募集されています。熊本大学へ入学してくる新入生たちのほとんどは、市内の様子しか触れる機会がないと思います。熊本城を中心に市内にも地震の傷跡がありますが、益城町など、被害の大きな地域には触れる機会が新入生は少ないと思います。ボランティアをする上で、他人から勧められて行動に移すというのはもちろん立派なこと。しかし、ボランティアの真の姿は、自分がやらなければならないという使命感を持って、自分から能動的に行動に移していくものだと思います。熊本大学内にも、災害支援の活動を行っている団体は多数あると知ることが出来たので、これからも支援に関する情報発信を行っていただきたいと思うとともに、これからの災害支援活動にも、参加すべきなのだと思います。地震で学んだこと、避難所で学んだことは、熊大での地震時の様子を知らない後輩たちには、災害支援の大切さとともに話したいと思います。

# No.52

工学部 物質生命化学科 4年

## 吉田啓汰

活動日時 平成 28 年 4 月 17 日 ～ 平成 28 年 4 月 25 日

活動場所 黒髪小学校

## 活動内容

私は本震発生の翌日に黒髪小学校に避難し、一晩過ごした後、自分にできる事だけでもやろうと思い、活動しました。以下に活動内容を記します。

4/17：黒髪小学校は給水ポイントとして指定されており、多くの人に来ていたので車の誘導や水道局の方々の手伝いを行いました。また、自力で来ることのできない人や近くの病院、避難所などに周囲の人の協力をいただいて水や不要な物資（赤ちゃんがいない状況での紙おむつや粉ミルク等）の分配を行いました。

また、避難所を運営する団体等がなかったため、ボランティアで避難所を運営する団体を設立して4/18～4/25まで活動し、その後は市と学校に活動を引き継いで終了しました。

活動時間について

定期的に来てもらえるボランティアが複数いたため、負担も考え、朝食、昼食、夕食の時間を基準にシフトのようにして3交代制としました（8時～13時、13時～18時、18時～22時）。

【活動内容について】

①給水ポイントに指定されていたため、交通整理や情報の拡散、給水の補佐

②校内の衛生管理（トイレ掃除やアルコールによる除菌など）

③救援物資の管理、物資の確保

④1日3食を基準とした食事の配給

⑤他の団体等との連携（炊き出しの依頼、不足もしくは余剰物資の融通など）

私は、代表として主に③④⑤の活動を行い、他の活動の指示や人員の割り振りを行いました。また、深夜の地震に備えた避難経路の確保や深夜来られる方の対応を行いました。

【その他の活動】

SNSを通じて多くの人からボランティアに来てくれたので、他の避難所と連絡を取り、人員の足りていないところに派遣し、活動していただきました。

避難されている方々とコミュニケーションを密接にとり、ストレスの削減に努めました。避難所内でのトラブルはほとんどなく、効果はあったと思います。また、トラブルが発生した際もすべて解決することができ、信頼関係を築くことができたと考えています。

私個人の活動としては、上記の③④⑤を4/18～4/25まで、黒髪小学校で主に朝7時～深夜2時まで行いました。

SNSで誤った情報が拡散されていたため、避難所の現状を1日3度を目途に発信、拡散していただきました。

今回、ボランティアとして活動するにあたり、私は本当に多くの人に支えられました。両親をはじめとして、ボランティアに来てくれたメンバーや黒髪小学校の先生方、なにより避難していた方々に理解と協力があつたからこそ活動を続けることができました。

後輩に今回の経験で伝えることがあるとしたら、自分が一方的にしてあげているのではなく、周囲の理解や協力があつて初めて活動として成り立っているということです。自分の力だけではやれることはたかが知れていますが、周りの人に協力してもらえるだけでやれることは一気に広がります。こういった経験を、今後も何らかの形で復興に関わっていく、または今回炊き出しなどでお世話になった団体の活動を手伝うことでボランティアを続けていくことで伝えていきたいと考えています。



# 写真で見える 学生の活動

- 1: 地震後の大雨で流された稲の植直し (菊池)
- 2: グローバル教育カリッジによる音楽を通じて気持ちを豊かにする支援
- 3: 手が付けられなかった畑のハウス撤去 (菊池)
- 4: 地震で倒れたたいけの原木を立て直す (菊池)
- 5: 学生ボランティア報告会の開催 (平成28年10月16日)
- 6: 熊本県立大学の学生ボランティアとの交流
- 7: 地元社会福祉協議会や支援団体と一緒にサロン活動 (宇城)
- 8: 熊本大学黒髪体育館での避難所運営。本部では各学生団体のリーダーたちが運営について協議 (平成28年4月16日夜の黒髪体育館)
- 9: 自身のボランティア活動について報告 (ボランティア報告会)
- 10: 長期の避難所生活に備えてパーテーション設置のお手伝い (益城・御船)
- 11: 宇城市の仮設住宅でサロン活動
- 12: 雨の日の運動支援は学習支援に変更。算数ドリルとの格闘 (滝尾小学校)
- 13: 避難所運営の取り組みや反省を後輩に伝えるための振り返り会
- 14: 避難所生活が長引き栄養バランスが崩れた食事の改善のために、届いたサブジメントを分包する
- 15: 風評被害に苦しんだ県内観光地の情報を取材しウェブサイトで発信する活動
- 16: 西原村での今後の活動について、地元の支援団体の方にアドバイスをいただく
- 17: 宮崎大学の学生ボランティア団体に経験の共有
- 18: 運動支援で人気だった手つなぎ鬼 (御船高校グラウンド)
- 19: 仮設住宅への入居などで集落がバラバラになった地域で地区の情報誌配布のお手伝い (西原村)
- 20: 御船中学校に間借りをしている滝尾小学校の子供たちに運動支援 (御船)
- 21: 地震後の大雨で家の中に流れ込んだ土砂を運び出す (南阿蘇)

# おわりに

同じ地震を経験しながら、学生のみなさんは様々なボランティア活動に参加をしたにも関わらず、仲間たちがどのような活動に参加をしたのか知らない人が多いのではないのでしょうか。あっという間に時間が過ぎ、余震が落ち着くころには、疲れや達成感に満たされていたかもしれません。「あの日」いた場所や住んでいる地域の違い、一緒にいた人など本当にちょっとしたことで、震災後のボランティアにいたるきっかけは変わっていたと思います。「ボランティア」という言葉を意識することなく、「とにかく何かやらなくては」そんな想いで動いた学生も多くいたのではないのでしょうか。活動は、よいことばかりではなかったかもしれません。一方で、思いもしなかった出会いもあったのではないのでしょうか。

経験をつなげることができるのは、ボランティア活動に参加したみなさん自身です。震災を経験したからこそできた強みを、みなさんりの方法で将来につないでみましょう。

## 震災復興に向けた大学生のまなざし

社会連携科目「災害支援実践」レポート・活動報告

平成 29 年 3 月発行

発行：熊本大学 地域創生推進機構 地域創生推進室  
〒 860-8555 熊本市中央区黒髪 2-39-1 TEL: 096-342-3096

協力：復興ボランティア活動支援プロジェクト、熊本大学学生支援部



 **Kumamoto University**